

群馬県無形文化財緊急調査報告書
群馬県教育委員会編

小正月のつくりもの(五)

—— 総論・図版編 ——

序

文

元旦を中心とした大正月に対して、正月十五日前後を小正月と呼び、古くから豊作祈願のための予祝行事が集中しております。

「小正月のつくりもの」はその典型的な事例で、ニワトコ・ミズブサ・ヌルデ等の木で作製したケズリバナ・栗穂稗穂・ハラミ箸・カユカキ棒・農具等を供え、また、マユダマを作つて座敷に飾ります。

しかし、このような「小正月のつくりもの」も近年の急速な生活様式の変化により次第に姿を消しており、この動きは都市化の進む平野部だけでなく、奥山村部にも広がっております。そこで、この貴重な無形の民俗文化財を記録保存し、広く県民一般の方々に紹介して後世に継承したい、というのが本調査の目的です。

調査は、昭和六〇年度から五年計画でおこなわれ、これまでに地区別に四冊（利根地域、吾妻地域、西毛地域、中・東毛地域）の調査報告書が刊行されました。また、調査の対象となつた御家庭から小正月の終了後に寄贈いただいた「つくりもの」についても、県立歴史博物館での分類整理作業が終了しました。

そこで本書は、これまでの調査を概観し、本県の「つくりもの」と正月の民俗行事の関係についても解説すると共に、収集した資料の図版・写真を系統的に分類整理して提示することにより、今回の調査全体のまとめとなるように考えたものです。

今日このような伝統的な製作技術を継承する後継者の減少は著しく、本書の刊行が、「つくりもの」をはじめとする無形文化財の保護と継承に少しでも役立つよう切望します。

また、最後になりましたが、本報告書の刊行にあたり、調査員の各先生方はもとより、関係各機関の数多くの方々にご協力をいただきましたことに、深甚なる謝意を表す次第であります。

平成三年三月

群馬県教育委員会教育長 坂 西 輝 雄

無形文化財緊急調査実施要綱

1. 調査旨

本県には多種多様の無形文化財が存在しているが、社会生活の変化により急速に消滅しそうとしている。

そこで、特に重要なもので、緊急に保存対策を講じなければならぬ無形の文化財について、調査のうえ記録を作成し、保存対策の基礎資料を得る。

2. 調査対象

「小正月のつくりもの」

元旦を中心とした大正月に対し、正月十五日前後の小正

月には古くから農作祈願の一つとしての農作予祝行事が集中している。その一つとして小正月のツクリモノの行事がある。小正月を迎えるにあたってものつくりをして飾りかえを行なうこの行事は、地域によって「ものつくり」・「かざりかえ」など様々な名称で呼ばれ、実際につくられるものの種類も豊富である。

マニダマ（メーダマ）・ケズリバナは「つくりもの」の代表的事例であるが、この他にも栗穂稚穗（アーボヒーボ）、

依・農道具一式・木刀類、ドウロクジン（道陸神）をはじめとする各種木像類、カニカキ棒、ハラミバシなどの製作が知られ、それらの地域的特色も著しい。

これらの製品は庶民の生活と密接なかかわりをもらながら

今日まで人々に親しまれてきた。しかし近年ではこれらを製作する人々は減少し、作品の量も種類も少くなっている。

そこで、現在残っている製作技術を中心に、事例（特定の個人の家）ごとに、「小正月のつくりもの」全般にわたって調査する。

3. 調査主体者

群馬県教育委員会

4. 調査計画

(1) 調査期間

昭和六十年度より平成元年度までの五年計画（従来の四年計画を一年延長）

(2) 調査地域

県下全般を次の五地域に分割して各年次ごとに行なう。

○昭和六十年度（第一年次）吾妻地方

○昭和六十一年度（第二年次）西毛地方

○昭和六十二年度（第三年次）利根地方

○昭和六十三年度（第四年次）中東毛地方Ⅰ

○平成元年度（第五年次）中東毛地方Ⅱ、補充調査

※ 詳細は別掲地図を参照

阪本英一 県立図書館主任専門員兼館外奉仕課長

阿部 孝 前新治村立入須小学校長

奈良秀重 中之条町文化財調査専門委員長

神宮善彦 県立歴史博物館主任

井野修一 前橋市教育委員会文化財保護課主任

井野誠一 前橋市教育委員会文化財保護課主任

5. 調査内容

- (1) 特定個人の家ごとに「小正月のつくりもの」すべてにわ
たって、その種類・技術・特色などについて調査する。

- (2) 伝統と製作技術の継承

6. まとめ

- (1) 調査資料・図面・写真などの作成・保存

- (2) 各年次ごとに調査報告書『小正月のつくりもの』を発行
する。

目 次

総論編 「群馬県の小正月のつくりもの」

一

群馬の正月行事

〔一〕 正月の準備 1

〔二〕 大正月 3

〔三〕 小正月 5

〔四〕 二十日正月 12

〔五〕 シマイ正月 13

〔六〕 群馬の小正月のつくりもの 14

〔七〕 「年中行事記」にみる「つくりもの」 14

〔八〕 「つくりもの」の分布 17

〔九〕 「予祝」の「つくりもの」 22

〔一〇〕 伝承のために 27

図版編 「形状で分類したつくりもの」

形状からの分類表 29

A ケズリバナ 29

〔一〕 ダン(既)バナ 31

〔二〕 クルマバナ 32

〔三〕 チヂレ 40

〔四〕 ノシ 42

44 42 40 32 31 29 27 22 17 14 13 12 5 3 1 1
1頁

(E)	その他	45																			
B	農のツクリモノ																				
(H)	農道具																				
(D)	福俵																				
(D)	アワボヒエボ																				
(D)	その他																				
C	年占用具																				
(H)	カユカキ棒																				
(D)	ハラミ箸																				
(D)	その他																				
D	神像・木刀等																				
(H)	木造																				
(D)	木刀																				
(D)	道祖神祭り用具																				
(D)	便所神様																				
(D)	その他																				
E	マニダマ																				
(H)	マニダマ																				
(D)	マニダマ木																				
F	雉子車																				
(H)	雉子車																				
76	75	74	72	71	70	69	69	67	65	64	63	60	57	56	55	55	52	50	47	46	45

総論編

「群馬県の小正月のつくりもの」

一、群馬の正月行事

(阪本英一)

二、群馬の小正月のつくりもの

(阪本英一)

三、今後の伝承のために

(阪本英一)

一、群馬の正月行事

(一) 正月の準備

すすはき

正月を前に大掃除をすることをすすはきとよび、十二月十三日をその日というが、実際には十日おくれの二十三日にすることが多い。神棚や仏壇までもきれいにして、上げてあった燈も出して正月の準備が本格化する。この夜はヨゴレメシとよぶ「しょうゆ飯」を食べる。

お松迎え

大掃除をすませた午後、山へ行つて門松などの松をとつて来る。一般には家より上の方から切り、運んで来ると屋敷神の所に置き、米を供える家もある。

シメナワない

大掃除がすむとシメナワないが始まる。

暮市

昔は、各地で市が開かれていたが、暮の市は正月物を中心で、近在の人々が正月買いのものでにぎわった。中之条の暮市は二十六日、いろいろな品物の中に六合村のメンバもあり、神供えの器となつた。

歳暮

嫁いだ娘は、親が健在のうちは、歳暮を実家へ届ける。山村では、新婚の家では舅師に頼んでキジの雄雌一対をとつてもらい、これを「

お歳暮」とするのが最高だったという。一般には塩鮭が多かった。

餅つき

餅つきは三十日が多いが二十八日もある。一般には二十九日は「苦餅」といっていやがるが、「苦を掲きこむ」「二九（福）を掲きこむ」「福餅」といってこの日にする家もある。

正月棚

一夜飾りをしないので餅つきと平行して三十日にする。お棚に柏の木を割ったものを使う例もある。歲神棚の前にはオカザリとよぶ海幸山幸を下げるが「先祖代々（ミカソ）」と呼ぶ家が多く、これにホウズキ（名聲鳴りわたる）、フキノトウ（富貴にくらす）、根のついたネギ（友白髪）を吊るしたり、傷のある鱗を吊るす（あたります）家など、家ごとの縁起ある飾りつけをする。



歲神さまのオカザリ
安中市下間仁田

年とり

大晦日を年とりとよび、米飯に塩鮭の切身で祝う例が多いが、そばの家もある。この日茄子と菊の枯れ木を燃すこともある。「借金ナスがら（返済すること）」、いい事キクがら（聞く）」という縁起といふ。

中之条町では、当主はミノと笠を身につけて、いろいろ端で、泣きながら冷飯を食う（他の家族はあたたかい食事をする）例もある。また黒保根村では、オミタマ様の飯といって少量の飯を炊き、全部盛りつけて仏壇に供えることもみられる。

(二) 大正月

元日

年男

正月の行事を司る男で、松の内（三ヶ日と七日という例もある）は一番早く起きて、いろいろ準備をしたり、食事の用意をして、供えものもやる。ふつうは一家の主がしたが、子どもが大きくなるとやらせたりした。

若水

元旦の早朝、年男が井戸（用水もある）から汲んで来て、湯をわかし、お茶を入れて歲神さまや仏様に供えた。昔は朝湯をたて、家族全員が入ったが、近所を呼んで入ることもやっていた。

朝食

年男が作る。若水で雑煮をつくる。一般には、ゴボウ、ニンジン、里いもを入れたもので、イモ雑煮などもある。県内には餅を食べないでソバにするソバ家例や、ウドンの家などもあった。

供えもの

松飾りをした所に、年男が供えものをしてまわる。吾妻郡西部などでは門松など外の神にワラワーンをつけておいて、ここへ供える例もあるが、一般には枕の上にのせたりした。家の中の神仏には神の鉢で上げるが、吾妻郡では白木のメンバで上げる家が多くた。上げたものは下げずに上に重ねておく。

年始まわり

昔は、村中全部の家をまわったものだが、近年は一か所（氏神とか公民館）へ集まって新年会をする。この時、村の申し合わせをする例

もある。

山入り

初山入りは地域によって日が異なるが、利根郡や吾妻郡では二日にボク（マユダマ木）やハナ木を切りに山へ行く。オサゴ、頭つき、塙切り餅を持参し、十二様（山の神）に供えてから切って来る。多野郡では家中の男衆が山へ行ってフタリモノの木（主としてマルデ）を切ってきて、家のよく見える場所に立てて、男手の多いことを示したという。「切る」といわず「ハヤス」という所もある。また「若木迎え」という名称もある。

トロロ汁

三ヶ日のうちに、山芋でトロロ汁をつくりて食べる。中氣（中風）にならないという。正月に里いもを雜煮に入れることや、歳神への供えものにイセ串（イセ田楽）を供えることとも関連があろう。

オタナサガシ

四日朝、三ヶ日の間、歳神様に上げた供えものを下げて、これをオジャ（雜炊）にして食べる。お寺さんの来ないうちにやれという。寺の年始はこの日で、壇家をまわり「年頭」を置いて行く。

嫁の年始

四日が「嫁姫の年始日」で、マス（糞）の下とよぶ大きな板餅三枚を持って実家へ年始に行き泊って来る。

六日年

六日夜が年取りで、年始に出かけた娘も帰って来て年取りと一緒にするものという。
六日爪といって、この日、正月になつて初めて「爪切り」をするといい、またマユダマ木の小枝を切つてマユダマをさせるように作ることもある。この日に「山入り」をする所も多い。

七 草

七日朝 七草の入った粥をつくって食べる。七草といつても七種でなくもよく、ナズナをナナクサとよんで、これ一種が入っていればよいという所もあり、「一夜ゼリ」をさらうので、二日頃とて来て、歳神様の前に他のオカザリと一緒に吊るしておいて、六日夜に「七草の歌」を唱えながら用意したりしている。七草がすむとお松外しをする所も多い。

八日ダメ

八日に便所の汲みとりをすることで、どんなに少しでもこの日にやるものという。

(三) 小 正 月

鍼立て

カダテ、サクタチなどといい、十一日朝、正月の松に小さいシメをつけたものを田に立て、オサゴ(米)やゴマメ(魚)、餅ひと重ねを供え、鍼でサク(ウネ)を三サク(条)切る。長さは三尺とも六尺ともいう。弁当を用意して食べて来る例もあるが、米は一升ほど供えて持ち帰り、十五日粥に使う家もある。

倉びらきは一般の農家ではことばだけでどこの家でもやるものではない。

モノヅクリ

十二日という地域もあるが、十三日、十四日という所もある。山入りで切って来たハナ木やヌルデで、各種のハナ、カユカキ棒、農道具、アワボ、ヒエボ、タワラや、道祖神木像、カタナなど、地域の特色をもつたつくりものを作る。したがって材料の木や、つくりものの種類にもかなりの変化がある。

作る場所は、縁側であったり、イロリ端であったりして一定していないのは、四冊の報告書に記したとおりである。かってはハナなどを持つて近在の村々へ行商にまわった例もあり、いくつかの市に売りに出た報告もしたが、十一日の中之条のボク市、十二日の渋川の市は現在でも続いている。昭和三十年頃までは富岡市一ノ宮、七日市、富岡と三日間ボク市があつたことははつきりしている。

マユダマ

西上州ではマユダマをまるめて作るのは十二日夜で、これをマルメ年という。形は丸いものやマユ形のものが中心で、大きいものを十六個（十六マイダマ）、十二個（お天道さん）などもある。十三日にゆでたりして（ふかすことも多い）山入りに切って来たマユダマ木（ボク）にさして飾り立てる。「カシ金が増えるように」というのでカシ（櫻）の枝にさすこともある。十六マイダマは蚕神に上げるので桑株にさしたりする。

マユダマ作りは十四日のドンドン焼きの時間で日が違うともいえるもので、十四日早朝にドンドン焼きをする地域では十三日に飾っておかねばならず、夕方から夜にやる所では十四日になって飾りつけても間に合うわけで、オカザリカニの日が十三日、十四日というのも同じ理由からである。

若餅

マユ玉をふかして飾る時、餅つきをする。お供え餅をつくり、のし餅にしたりする。小さく切ってマユダマのように木の枝にさしたりすることもある。これを桑の葉というには新治村などであり、カシの枝にさしてカシ餅というのは妙義町、カゴ木にさすのは赤城南麓から東上州にかけて見られる。

カザリカエ

松飾りなどを外して、ハナやマユダマを飾ることをオカザリカエといい、十三日又は十四日にする。吾妻郡や利根郡などでは十四日夕方までに間に合えばいいというので、モノヅクリもこの日にすることが多い。

成り木責め

マユダマのゆで汁を容器に入れ、一人でナリコダマの木（柿など実のなる木）の下で、一人が鉈を振り上げて「成るか成らぬか、成らぬと打つ切るぞ」と唱えると、もう一人が「成ります 成ります」と答え、ゆで汁を木の幹や根元にかける。少し切りつけて切口にかけることもある。

セツチンビナ

正月に便所神の松飾りをして供えものをするが、小正月にはマユダマを供える。片品村、利根村、月夜野町、新治村などでは、十四日夜、セツチンビナとか、セツチンヨメゴなどとよばれる人形を作って祀つて来た。古くはトウモロコシの皮で作ったこともあるが、近年は半紙で男女二体を作り、十四日夜に祀り、そのままとするので、家によっては何組も残されている。六合村などでは初詣売りが持つて来た絵姿を使所に貼つておいた。

十四日年

年とりは十四日夜、米の飯に塩鮭というが、オシラマチといふこともいわれて、蚕神に供えるといふのでソバをつくる。「マブシ（蕷）」の吊り糞」といわれ、オシラ様が祀られているとみられる床の間などのマニダマを飾った所へ重箱で供えられたりする。

ドンドンヤキ

西上州などでは十四日朝、吾妻郡などでは夕方から夜に行われる。松飾りなどを集めてやる所もあるが、山から竹や木を切つて来て小屋を作つて燃やすなど、いろいろのやり方があり、子どもたちが活やくしたことも知られている。七草がすんで松飾りを外すと（十四日朝のこともある）子どもたちはお松集めをして小屋を作る。こうした所では、年長者を親方として子ども組が活やくした。ドンドンヤキでは、松飾りやお札などを燃やし、マユダマや餅を焼いて食べる。歳神さまに供えたイカ（スルメ）を焼いて食べることも



小正月の門松 14日朝門松を外して
ハナと松の小枝、竹の枝にとりかえる。
吾妻郡吾妻町本宿字丑ヶ淵

悪魔払い

吾妻町坂上地区、安中市下秋間、藤岡市金井などでは、十四日夕食後、子どもたちが村中の家々を悪魔払いをしてまわり、祝儀をもらう。子ども組としてやるものであるが、吾妻町道泉谷戸では、村の行事として獅子舞が家々をまわる。安中市新寺の子ども組による鳥追いには、手作りの獅子や神さまが加わってお祓いをしてまわる。



道祖神に供えられた
吾妻郡六合村入山



道祖神に供える
多野郡上野村乙父

オミタマサマ

十四日夜、夕食とは別に、少量の飯を炊き、小さいにぎり飯十二個にして重箱に入れ、ハラミ箸を一本ずつ立てて仏壇に供える。箸はウツギの枝の場合があったり、数がちがうなどもみられ、オニダマとかマルビということもあるが、小正月に訪れる神として先祖さまが考えられていることを示している。歳神棚の一方にオミタマサマを祀る例は赤城南麓の村々などに広く見られることがある。



オミタマサマ
館林市日向

一般的である。厄年の人々はこの場で厄おとしをしている。西上州ではカタナ(木刀)を火の中へさしこんで焼き焦がしてから持ち帰り、戸口に掲げて魔除けとした。吾妻郡では長野原町、吾妻町、中之条町などでは、道祖神木像を焼いている。松の燃えくじは持ち帰って屋根に上げて火伏せとした。吾妻町岩下ではこの時キジ車の背に結びつけて家へ運んだという。

水祝い

松井田町入山、上野村白井、万場町小平などでは、十四日夜、若者組が、ヌルデの木で男根形の作り物を作つて（入山ではイジメと同じ類のかごも作つた）新婚の家へ押しかけ、無理やり花嫁に抱かせて子孫繁榮を祈願する行事があった。（イジメとは赤ん坊を入れて子守りをする道具の名称である）

鳥追い

十四日夜、いろいろな行事のしめくりのようすに鳥追いがある。昔はかなり広く行われていたとみられるが、現在では吾妻郡内の六合村、長野原町、吾妻町、中之条町、前橋市總社地区の一部、安中市の宮本、新寺、馬場、原市地区、松井田町人見地区などでみられる。總社地区や新寺などは子ども組の行事となっているが、他は村中が参加して、鉦や太鼓を鳴らし「鳥追いの歌」を歌いながら、村の上から下まで農作に害をなす鳥や獣、さらには疫病や災難までも追い払うという行事で素朴なものである。中之条町中之条や伊勢町では太鼓を多数並べて叩いてまわる祭りになつて、他地区の鳥追いとは違つて、また安中市原市のものは鳥追い祭と名づけられ、数台の山車を出した冬祭りになり、鳥追い歌はない。

群馬郡棟名町里見、倉渕村三ノ倉、富岡市一ノ宮などの道祖神祭りは鳥追い祭りとつながるものとみられる。

お箇粥

端戸村鎌原では、十四日夜、氏子総代が鎌原神社の社務所に集まり、神社に供えられた米を鍋に入れ、昼間のうちに用意したオツツ（ヨシの茎を節のない部分を切り揃えたものを二十六本、スダレ状に編んで巻いたものに三又の支柱をつけたもの）をその中にさしこみ、イロリで



オンマラ様

14日夕、祀られた時にオンマラ様の向いた方角の家に子宝が授かるという。

多野郡中里村神ヶ原間物



鳥追い

安中市鹽宮宮本

炊く。炊き上ると鍋の蓋の上にのせて拌殿に持参し、供えて参拝してから社務所に持ち帰り、作法にしたがって小刀で順次割り、中に入った米粒やオネバの量で作物の豊凶を占う。作柄の判定は合議できまり、結果は記録されて村中に配られ、作付けのめやすとされて来た。

粥は参加した人たちが食べたり、村人が容器を持ってもらいに来たが、これを食べるときゼをひかないという。

甘楽町福舎神社では六日に、桜竹の筒を使って行われ、十四日夜から十五日朝にかけては貫前神社、赤城神社、榛名神社などでも神事として「御箇粥」が行われている。

アワボ、ヒエボ

つくりものとしてアワボ、ヒエボが堆肥場に飾られるだけでなく、行事として行われた伝承もある。六合村、子持村、渋川市などで聞かれては、十四日夜、家族の寝静まつた頃、主人夫婦が裸になつてイロリのまわりをはいまわり、主人が股間を叩きながら「アワボヒエボこのとおり」と唱えると、主婦も股間を叩きながら「こんなれます（吼）に十かます」と答えてまわる。これがアワボ、ヒエボの裸まわりといわれるもので、公開されるものではないから幻の行事といわれていたものである。

十五日粥

十五日朝、小豆粥を炊き、炊き上るとカユカキ棒でかきまわす。この時に唱え言を唱えたが、現在では伝えられていない。カユカキ棒の先の割れめにマユダマをさしこみ（餅の場合もある）落ちたマユダマが茶わんに入った人が田植えの時のハナドリ（馬の口取り）をするにきまるとか、あたり年だといつたりすることもあった。また取り上げたカユカキ棒の割れ目に米粒がたくさん入ると「豊作」。粥に水分が多くてゆるい時は「田植えの時水の心配はない」といって喜んだりする。「粥占」である。

小豆粥を食べる時はハラミ箸を使う。熱くとも吹いて食べることは禁じられる。田植えの日に風が吹くからといわれる。食べ終ると箸をわらで十文字にしばつて屋根裏にさしたのは利根郡の例で、多野郡ではとつておいて争いことや出征兵士の食事の時使わせると勝つといわれた。スル



ハラミ箸
この家では、14日の昼にハラミ箸で、ソバを食べる家例になっている。
吾妻郡吾妻町本宿丑ヶ淵

デという文字は「勝木」（櫛）ということである。

夜なべ仕事

十五日夜「夜なべ仕事」といって、縄ないをする例もある。ハヨウナワは馬耕の時の駆やマンガ（馬歎）をひく縄、それに草刈り用の縄をなって、土間の柱に吊るした。

マユネリ

十六日朝、適当にマユダマを抜きとつて、味つけせずに水煮して、仏様に供え、家族で食べる。これを西上州ではマユネリといふところがある。マユダマを縄とみたて、これを煮る（煮蒸）ことで、縄糸のための糸口をよく出すといい、ショウユをかけて食べると汚れ縄が出るからいけないと、ゆで汁と一緒に食べる。（砂糖をかけて食べることは白く上がるというので認められてきた）

馬屋肥出し

十六日（家によつては申の日）、馬屋の肥を出す。一般に暮にやつてあるので量は多くないが、どんな少しでも出すものとされる。この日利根郡や勢多郡の一部で、センビキガユ（千匹粥）を行う。桶わらでツトコを作り、この中へ稗などを煮たものを入れ、家の近くの三本辻に送り出するもので、馬の餌といわれる。新治村羽場では、主人の茶碗に飯を盛り、膳立てして馬小屋（内馬屋）の前に供えた。

かかし

赤城村や月夜野町では、十六日に、カカシを作つて立てたというが、他にあまり事例がなく、意味づけははつきりしていない。

十八ヶエ（十八日粥）

十五日の小豆粥を残しておいて、この日に炊いて食べる。これを十八ヶエとよぶ。

初観音

十八日は初観音で、馬のいた時代には、馬を飾りたてて近くの馬頭観音堂（他の観音でもよい）に参拝した。県内にはいくつかの有名な馬頭観音で終日にぎわった。馬の健康は、その家の浮沈に直接かかわる大事なことだった。

マユカキ

マユダマ飾りは、十六日から書き始める。蔴を書きとこと結びつけてマユカキとよび、一斗桶などに入れて豊葦の縁起とした。「二十日の風に合わせるな」といって、二十日より前にすませたが、これは農作物の収穫を確保するため、二百二十日の大風にやられないようのことである。

正月棚も二十日までには取り外して片づける。枠材を割って作った歳神棚は、氏神の境内へ納めたりするが、利根郡などでは屋根の上に投げ上げる例もみられる。

(四) 二十日正月

エビス講

正月に行うエビス講は「朝エビス」が多く、エビス・大黒様は「二十日朝に稼ぎに出かける」からやるといわれ、秋のエビス講より質素にするものといわれ、マユダマの難煮を供えることや、お膳の上に供える財布の中身も少くするのは、「稼ぎに出るには路銀の他に余分な金を持たせない」（たくさんあると遊んでしまうからという意味）といわれる。前橋市近在の農家では、九日の初市でフナを二尾買つて来て、小正月の供えもの（正月様へ吊るして上げる）としたあと、エビス講にはコブ巻にして供える。鰯は蒸のフナ休み（三眠）に通じるのでマユダマ飾りと一緒に



エビス講
エビス様の上に「七福神」と書かれた福俵
が供えられている。
多野郡万場町柄本

飾られ、エビス・大黒という百姓の神さまに供えて一そاعの豊蚕を祈るわけである。館林市周辺では生きたフナをどんぶりなどに入れて供え、翌朝、主人が川へ放したり、井戸に放したりする。これは豊漁祈願の意味もある。

二十日ヤキ

二十日夜、小正月に使った飾りものなどを集めて、ドンドンヤキと同じことをすることが吾妻町などである。ここでも子ども組が中心になるが、厄おとしはしない。

(五)

シマイ正月

初不動

シマイ正月というが特別なことをする例はほとんどみられない。初不動の縁日というので、赤飯をふかしたり、近くの不動さんへお参りに行くこともあるが、一般には仕事をする日であり、これで正月が終わりというめやすの日であった。

二、群馬の小正月つくりもの

(一) 年中行事記にみるつくりもの

小正月つくりものに関する古記録、國会の類は、これまで発見されていないが、年中行事記はいくつか報告されている。

閑里歲時記（川野邊寛著、安永九年）には正月七日の項に高崎城下のこととして、「新町初市あり（中略）此市に糞を箸の如くにして、末に青赤等の染紙を一二寸程に裁て、半を細く裁裂、糊にて彼販の末に巻つけ、ひらひらとして拾本ばかりを一束としてひさぐ。里俗これを花と名づく（中略）家々是を買って、門松を去しあとにさしはさむ事あり（後略）」

ここでは「花」というものが門松のあとに飾られるところがあるが、今日まで他に例を見ないもので、小正月のものではない。十四日に、「今ニワトコ日陸英を糸のごとくけずりかけ、或は大菊の花形にして門戸に繫、又長さ六七尺にして數所をけづりかけ、菊花を串にさせる」とくにして神棚の宅中にかく、是をけづりかけと名づく。（中略）

今日神棚及宅中にがざりたる松、竹、蘆、柳の枝などへ米粉のだんごを多くさし、花の咲るごとにさしてさしはさむ（以下略）

十五日には

「（前略）耕作をつとむものは、陸英を一尺ばかりにきりて末を二つにわり、だんごをさしはさみ、今朝粥の熟せる時、彼木にてかき廻し、其木に神符などをさみて、己が田地にもちて水口に立置もあり（後略）」

閑里歲時記の著者は高崎藩士であり、記録の内容は城下町高崎の習俗であるが、「ニワトコの糸を糸のごとくけずりかけ」というのは今日のハナ、ホダレの類とみられ、「大菊の花形」は、「クルマバナ」の系統、「長さ六七尺にして數所をけづりかけ、菊花を串にさせる」とくにしたハナは「十六バナ」の類とみることができる。またマイダマは蚕糞の子祝のところのよしといふことは、當時すでに蚕糞の儀礼としてのマユダマが定着していたことを示している。またカユカキ棒も作られ、十五日朝に使った後に水田の水口に立てることも行われ

ているが、ハラミ箸については記録がみられない。

文政年中頃に書かれた中沢家年中祭記には正月六日の項に

「（前略）此日山入としテ餅式切こぶ御供米添ヘテ紙毛枚遣し、升ニ入 山ノ神を祭ル（後略）」

とあって山入りをやっていることがわかる。また十四日の項には

「朝 花をかく、持畠ニ庭木之木無之候ハ、十二日市ニ求ベし、畠ニ有之候ハ、七日頃伐置候事、十六といふて桑の木根々伐取り來リ是ヘまゆ玉をさし へ上ル

十六といふて桑の木根々伐取り來リ是ヘまゆ玉をさし 座鋪ニつるス 桑者蚕之能あたり候内の桑を十三日晚ニ伐來リ可申候

（中略）

花木之元ニテかゆかき廻し 株式本伐先ヲ四ツニ割 是江まゆ玉ヲはさミ十五日朝之かゆをかきまわし 年徳神御ミたま其外神々江上ル 文面からみてハナ木はニワトコであること（畠に植えてある）、ない場合は十二日の市で買ひ求めることがわかる。十六バナの他に十六 マユダマもあり、この木は蚕上手の家の桑株をもらって来ることもわかる。

「小林家年中行事」は、藤岡市中大塚の小林家が、江戸時代以来伝承して來たものを丹念に書き留めたものを、大正十年頃淨書したものといわれる。それによると六日には

『山入ト云フテ紙ニ米少々 餅二タ切田作リ一フタ入レ行小半紙ニ載テ備 小半紙毛枚ヲサキ幣ニ擬シ山神ヲ祭ル 面シテ籠木ヲ伐リ（十五日蘭玉ヲ指ス柳ノ木ナリ） ツ代 庭トコヲ伐リ 葉七種ヲ採ル』

山入りの作法がよくわかり、小正月に使うカゴ木（マユダマ木）と、ハナ木、つくりものの櫛の木を伐って來ることも示している。

十三日はモノヅクリで

『十三日 花搔キト云フ 刷リ掛ケノ花ヲ造ル 夜ハ蘭玉を鳴ル』

十四日には未明に子供らが来て煤竹燒（ドンドンヤキ）をしたが

『（前略）而シテ年徳神御靈神ノ七五三鯵松備物大鯵リヲ撤シ 十六ト云庭トコノ削リ掛十六節ヲ掛ケシ花ヲ式本紙水引ニテ祝ヒ備 其外

ヲ醸リ農具ノ形ヲ造リ備ヘル

又年神ノ棚松式本ヲ合セ十六ト云フ蘭形チノ大ナル蘭玉十六ト若餅ニ拂キタル備餅形ノ小ナルヲ交ヘ拂シ 又梅ノ枝ニ蘭玉ト云フ團子ヲ

拂シ備フル

神棚仏壇建物口々等ニハ櫛ノ枝エ挿シ備へ座敷ノ鏡ハ柳ノ加護木エ蘭玉ヲ挿シ中縁上リロノ大柱エ櫻枝ヲ結ビ附ケ蘭玉ヲ挿ス

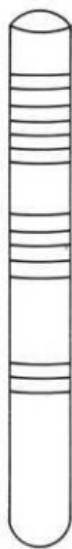
(中略) 削り掛けノ花火神々社々仏堂墓所等エ配備栗糖神糖ト云フ削り掛け肥場ニ立テル

大正月の松飾りや供えものを外して、小正月の供えものを上げるオカザリカエの様子がよくわかるが、「榜ヲ削り農具ノ形ヲ造ル」といふのは「櫛（オツカド）とよぶ」で作られる農具のミニチュアのこと、西上州を中心にも現在にも行われていることである。

県内での年中行事の記録の免見は少いが、ここに上げた数例でも一〇〇年ほど前にはすでにハナやマユダマが作られていたことが知れる。しかも閑里歳時記によれば、七草すぎにはヨシの茎に色紙をつけたベロベロを門松を外した後に飾ったこと、十四日にはケズリカケが飾られ、マユダマ作りも行われたことがわかる。しかもハナとケズリカケを区別しているが、ここでいうハナは今日では見あたらず、ケズリカケとされたものが一般にはハナとされている。中沢家年中行事では、木がなくてハナの作れない時は「市で求めよ」と書かれ、今日の中之条、渋川のボク市とのつながりを示している。また小林家年中行事では十六ハナの他に農具、アワボヒエボも確認できるが、カタナとよばれる木刀やオキンマラにはふれていない。吾妻郡にみられる道祖神木像やキジ車、鳥追い棒などについての記録はみつかっていない。

「館林市誌」に収録されている「山田家年中行事」は、館林藩秋元氏に代々仕えていた武家の記録で、正月十四日の項に

「一、けずりかけ神に仏前門口へ出す 尤も両わきへ巻本ズツ
一、おにうちぼう門口へ出す 尤も両わきへ巻本ズツ



右の通り真木ヘ七五三に筋を引き候事（後略）

とある。おにうちぼうは現在は見られず、多野郡内のオニノハといわれるものに似ているが、関連は明確でない。

(二) つくりものの分布のちがい

一、材料の木のちがい

小正月つくりものに使う木は、地域によってかなり違がある。特にハナ木は地域区分ができるようである。(第一表)
コメゴメ(キブシ) 名の由来は、春早く咲く花が、形、色、姿が穂穂そっくりなことからついたもので、削られたハナもホダレとよばれたりする。吾妻郡が中心である。

ミズブサ(ミズキ) 名のとおり古くから火伏せの木といわれ、建築儀礼に欠かせない木で、ハナ木としても上等なものが作れるので吾妻郡、利根郡が中心となる。枝が赤くなるのでアカボヤといわれ、マユダマ木としても喜ばれる。

ニワトコ 野生ばかりでなく屋敷木として植えられてハナ木とされて来た。芽吹きのよさ、枝の伸びのよさ、さらには薬用にもなることがあって養蚕家にも喜ばれた。十六バナもそんなことが背景にあるはずである。

カズ(コウジ) 和紙の原料のカズをとったあととのカズガラをハナ木として使うのは甘楽郡で、桑によく似た葉と、蒸して皮をむいた木の色のよさがハナになつても見ばえがするので利用された。



センによる
ハナづくり
吾妻郡六合村入山



小刀を使ったハナカキ
利根郡片品村土出

第1表

つくりものの材料

	利根郡	吾妻郡	西毛	中毛	東毛
ハナ	ミズキ タル コメゴメ	ミズキ コメゴメ ニワトコ	ニワトコ コウゾ ミズキ シラハギ カショウシン スルデ	ニワトコ	ニワトコ
典道具	×	スルデ	スルデ	スルデ	×
カタナ	タルミ	スルデ	スルデ	スルデ	×
キジ車	×	スルデ	×	×	×
道祖神	×	スルデ	×	×	×
作男作女	×	スルデ	×	×	×
アワボヒエボ	ミズキ 一部スルデ	スルデ	スルデ	ニワトコ	×
俵類	ミズキ	スルデ	スルデ	スルデ	×



ハナカキ（フルを作る）

吾妻郡中之条町大塚

ヌルデ 国字で「櫛」と書くことから、ヌルデ、カツノキ、カツボク、シヨウデンボク、オツカドなどと呼ばれ、多野郡でハナ木やつくりものの木になっている。

これらの木は、雑木というよりも下木で、材木にも薪炭にもならない木だが、皮をむいて削ると細工しやすく、仕上がりがよく、しかも香りがよい木である。

カユカキ棒等のつくりものは、中・東毛ではニワトコの太いものを使うが、大部分の地域ではヌルデを材料としている。

細工をする道具は、利根郡、吾妻郡等、つくりものがミズキ、コメゴメ、ニワトコを使用している地域には、ハナカキナタが使われ、向うから手前の方へ引くようにかいてきて作る。ところが、片品村では小刀（キリダシ）を用い、手前から向うへ押すように削る方法でチヂレやノシを作る。ヌルデを使う多野郡では、鎌などの刃物で作るが、これは木の性質上、こまかいチヂレ状の削り方が不可能なことからの工夫である。

二、つくりものの地域的なちがい

群馬県内のつくりものの分布状況は第二表に示されるような相異を示している。この表は概略的なものであるが、ハナ、カユカキ棒はほぼ全県的であるが、カタナ（木刀）や農道具のミニチュアなどは地域的にかたよりがあり、オニノハ、道祖神木像、カカシ神、作男作女、キジ車は、限定された小範囲だけに存在して、問題を投げかけている。

カタナ（木刀）は、主として西上州にみられる。大小二本作り、ドンドンヤキで少し焼いて一本は道祖神に供え、大きい方を家へ持ち帰り、トボグチ（門口）の上に飾って魔除けにする。多野郡では作ったものを、神棚や床の間、便所にも供える。またねじれた太いヌルデで作ったものをオキンマラ（キマラ）として道祖神への供えものとする。吾妻郡鷹巣村ではカンジン棒とよび、御幣の紙をたくさんつけたものを持った子ども達が、家々をまわってお祓いしてカンジンをする。長野原町では鳥追い棒とよんで鳥追い行事に持つものになっている。利根郡水上町では、タルミの木でドッコイ棒という大刀を作り、ドンドンヤキで焼いてから持ち帰り、屋根裏にさす。一般に道祖神信仰とつながりがあるといわれるが、必ずしも明確ではない。

農具のミニチュアは、西上州と吾妻郡に多く、西上州では歳神への供えものとされる。ところが吾妻郡では釜神さまへの供えものとして、作男・作女、アワ依・ヒエ依とセトになった形で作られ、飾られる例が多い。これに対して利根郡や中・東毛ではほとんど例がなく（黒

第2表

小正月つくりものの分布

	利根郡	吾妻郡	西毛	中毛	東毛
ハナ	○	○	○	○	△
ハナ(ノシ)	○	○	×	×	×
車バナ(菊バナ)	△	○	△	△	×
十六バナ	○	○	○	○	○
農道具	×	○	○	△	×
カニカキ棒	○	○	○	○	○
ハラミ箸	○	○	○	○	△
アワボ・ヒエボ	○	○	○	○	×
福俵	○	○	○	△	×
カタナ(木刀)	△	△	○	△	×
オニノハ	×	×	△	×	×
セッチンビナ	○	×	×	×	×
道祖神	×	○	×	×	×
作男・作女	×	○	×	×	×
カカシ神	×	△	×	×	×
キジ車	×	○	×	×	×
オキンマラ	×	×	△	×	×
マユダマ	○	○	○	○	○
ワタノハナ	×	×	×	○	○
モチバナ	△	△	×	△	△

○ ほぼ一般的に分布 △ 一部にある × ない

保根では臼や杵を作る）、西上州などの畑作養蚕地帯と異なる面を見せていくようにみられる。

特殊なつくりものとして注目されるのはオニノハ、道祖神木像、カカシ神、作男・作女である。

オニノハは、南上州ともいわれる多野郡の神流川上流一帯で、ヌルデを割ったものに、七・五・三の線を書いたもの、あるいは△型の絵を描いたものを作つて玄関など出入口の左右に立てるもので、他地域ではみられないものである。

道祖神木像は、吾妻郡内だけで作られるもので（東村では未確認）、十四四年とりに間に合うよう二体（男女と考へられている）作り、夕食を供えたあと、ドンドンヤキで焼かれる。その時、一体は石造道祖神に供え、他の一体は焼かれる例もあり、焼かずに二十日の早朝石造道祖神に供えたり、ドンドンヤキの場所近くの崖の穴の中に納める例もみられ、注目されている。

作男・作女は吾妻町岩島追地区を中心にみられるもので、男女二体で、それぞれの顔を描くこととあって道祖神木像とつながりをもつといわれるが、作男・作女は、

農道具のミニチュアやアワ

俵ヒエ像とともに釜神さまに供えられることをみれば、

単純に結びつけることは難

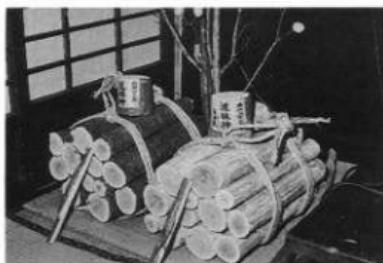
しい。釜神は家の神として

最も古い神とも考えられ、

田植えの日のマンガアライ（オサナブリ）や、稻刈り（麦刈り）のカマボなどに



仏壇に供えたノシバナ
片品村土出



アワダワラ・ヒエダワラ
上に道祖神をのせた例
吾妻郡長野原町羽根尾



できあがったハナを乾かす
中之条町大塚

みられるように、作神としての釜神信仰の習俗からみれば、作男作女は農耕儀礼の作りものとみることができる。

カカシ神は、六合村入山だけでもみられるもので、道祖神木像のように顔を描くが、道祖神よりも強い顔とし、一体だけで、神棚に上げ、十四日夜、山盛りの御飯を供える。一般にカカシは「田の神」と結びつけて考えられるが、この地区的の稻作は昭和二十年代からのことで、田の神信仰の伝承は知られていない。

(三) 「予祝」のつくりもの

一、群馬の風土

群馬県は、関東地方の西北部に位置し、三国山脈といわれる山々（谷川岳など）で日本海側と分けられ、「空つ風の上州」で知られるよう（一部地域を除いて）冬でも田や畑が雪でおおわれていていることはなく、麦や野菜の青さが目立ち、年間を通して日照時間の長いことでも有数の地方となっている。利根川の上流県であるが、水田よりも畑地が多く。米・麦の二毛作を中心にして、イモ、雑穀と養蚕を組み合わせた農業で生活を支えたものである。山がちなので傾斜地や火山灰土に桑の木を植えての養蚕が早くから発達し、製糸、機縫もわが国有数のものであった。

このようなことが小正月諸行事にも反映したものとみられ、十五日の小豆粥などにみられる稻作の儀礼、アワボヒエボの行事やつくりものなどの畑作、雜穀の儀礼、マユダマ、十六バナ、オシラ様行事などの養蚕の儀礼など、様々な農耕儀礼が生まれ、行われて来たものといえよう。第三表は、小正月行事と農耕の結びつきをまとめたものである。

二、豊作のねがい

アワボ、ヒエボ（栗穂・稗穂）

つくりものとしてのアワボ・ヒエボは、ヌルデの棒を十六本（八本の皮をむいてアワ、八本は皮つきのままでヒエという）作り、竹を十

第3表

小正月行事と農耕の結びつき

分野	日時	行 事	つくりもの等
山仕事	2～12日 8日 12日	初山入り 山の神 十二講	御幣、餅、魚、米
田仕事	11日 12～13日 15日	鍬立て モノヅクリ イロリの禁忌 十五日粥	松飾り ハナ、ホダレ、農道具ミニチュア カニカキ棒、ハラミ箸
畑仕事		モノヅクリ カカシ神 裸まわり	アワボヒエボ アワ俵、ヒエ俵、福俵 農道具ミニチュア 麻尺 笠神大明神 作男作女 カカシ神
養蚕	12日(夜) 13(14)日 14日(夜) 16日(朝) 16～19日	マルメ年 オカザリカエ(ズウアゲー上簇) オシラマチ マユネリ マユカキ	マユダマ作り マユダマ飾り、十六バナ、小判 ウドン(ソバ) マユダマの吸いもの (マユダマの片づけ)
馬	2日 16日 18日	馬の乗り初め 馬の肥出し 初観音	千びきがゆ
その他	14日(昼) (夜) 15日 20日	成り木責め オミタマサマ ヘビ ムカデ除け 二十日ゴオセン	マユダマのゆで汁 オミタマサマの供えもの 十五日粥の洗い水 香煎

六本に割って折り曲げた先へつるして、堆肥場に立て（七夕のように笹竹に立てるものもある）、豊作を祈るものであるが、これは米と麦という話はない。ところが、俵づくりにしばって作るアワ俵・ヒエ俵は、いつの頃から米と麦（皮つきのもの）という話ができる。これを小さく作ったものは釜神様に上げる家が多いが、「俵」とか「福俵」としたものは正月棚に供えることも少くない。堆肥場に立てるものは、このように穗が垂れ下がるほどの実りを願うものであり、「俵」は収穫の結果を示しているもので、予祝の作りものであり、供えものを示している。黒保根村では「オカマ様のマユダマ」の台にタワラを立てるが、これはつくりものを作った削りかすを芯につめて、ヌルデの木などを備にして俵づくりしたものである。小野上村ではこうした俵を二俵作って土間に積み、この上に地神さんを祀る。畑作が中心の地域のつくりものであることが共通している。イロリのまわりを裸でまわる行事も豊作を祈る行事で、アワボ・ヒエボの行事とよばれていることは、夫婦の唱え言が示している。

十五日粥

小豆粥をカユカキ棒でかきまして「粥占」もすることはすでに記したが、カユカキ棒は半紙に包み、水引きでしばって神棚に上げておき、苗代づくりの時に水口に立てるこになっている。これはゴミ除けだという話もあるが、中之条町などの例では、この上に焼き米をのせて鳥除けをす

るものとみられることから重要な意味を持たされている。ハラミ箸も同様で、田植えの日にはこの箸で赤飯を食べさせたり、富岡市では、

田植えの日の三時（オコジハン）にマンジニ



地神様
タワラの上に祀られる
キジリ（燃し木を入れる箱）の
向うに釜神が祀られている。
北群馬郡小野上村村上



アワボ・ヒエボ作り
吾妻郡長野原町林

ウを作り（田植えまんじゅう）、ハラミ箸に刺して食べてもらう例もみられ、カツボクではない「種作」と結びついた儀礼がみられる。

十六マイダマ

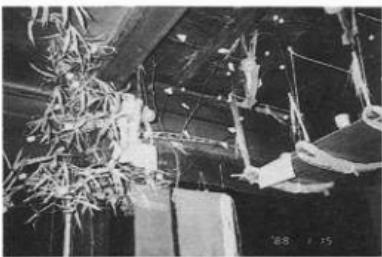
マユダマに使う粉は、米の粉が一般的だが、稗やソバ粉、小麦粉なども利用され、地域によっては赤や青色に染めたものも作られる。形は丸型が主で、家によってまゆ型もみられるが、十六マイダマとよばれるものは、ふつうのものの三倍から四倍もある大きなもので、マニ型のもの八個、九個のものまたは宝珠の玉型のもの八個、合せて十六個を桑株または柳の株にさして歳神棚（神棚）の前に供えることがみられる。桑株は蚕上手の家のものを切って来るなど、蚕への切なる願いがみられる。また新治村や吾妻町などでは、門松に使った笹竹に十六マイダマをさす例もある。大胡町など赤城山南麓から東上州にかけてはマユダマの他に餅玉を加えることも多い。カゴ木とよぶ十六マイダマの木は、飾られた姿からみても、ボヤマブシとか、竹マブシとよぶ木の枝の葉、竹の枝の簇に上蔟させて繭を作らせた状態を示しているものとみられ、マユダマを木の枝にさすことを行なう「お盆上げ」とよぶ理由がわかる。したがって、間里歳事記が記しているようにマユダマ飾りは養蚕の豊



ボク（木の簇を利用したマユダマ木）にさされたハナとマユダマ
利根郡新治村



十六マイダマ
右の株は桑の木で、四角のものは餅を切ったもの
左の木は、柳の株を使用
勢多郡大胡町茂木



オカザリカエ
左の笹竹にオシラ様に供える十六マイダマ
中央の三角のものをさしたのが桑の葉という
右の棚が正月棚で、ハナとマユダマを上げる
利根郡新治村東峰須川

作を祈願するものといえよう。

蚕神に供える十六ハナとよぶ十六段のハナ（八段一本で十六ハナもある）は、オシラ様（又は網笠様）のハナで、十六という数字は蚕の脚が八対（十六本）あることからの数という説明もある。十六マユダマも同じ理由というわけである。

十四日の夜のオシラマチとよぶ行事も、ソバ又はウドンを作り、マブシの吊り縄として供えることも赤城山南麓を中心とした地域に目立つていて、オシラマチは二月初午の行事の方がさかんで、前夜の己の日の夜、万場町では蚕神さまの松をイロリでいぶし、土間に出した臼を主人がトントンと搗くことをしている。臼を搗く音を聞いてけむりに乗ってオシラ様が降りて来るといわれる。下仁田町では、松葉をいぶした主婦が、タネ紙（蚕卵紙）とウチワを手に持って、門口でタネ紙を振り、ウチワでおいでおいでをしていた。黒保根村では、ウドンと芋田葉（里芋の芋串）と一緒にトコロとよぶ食べられない山芋を根をつけてそのまま洗って網笠様（蚕神）に供えて豊蚕を祈っている。この日蚕神が天から降りて来られるといい、お迎えする行方がオシラマチといわれる。

キジ車

六合村（入山を除く）と長野原町（羽根尾と応桑を除く）で小正月に作られるキジ車はモノヅクリの最後に、ヌルデの曲がった余り木で作るものといわれ、神様に供えた後、子供に与えて玩具となつたが、近年は作る家が少なくなつた。六合村小雨では大小二つのキジ車を作り、道祖神木像と一緒に神棚に上げられ、年通りがすむと小さいキジ車は道祖神と一緒にオンベヤ（ドンドンヤキ）で焼いたという。これは道祖神の乗り物としてのキジ車を想像させる。吾妻町岩下でも作られたが、ドンドンヤキに曳いて行き、その背中に松の燃えさしをつけて家に運び、燃えさしを火伏せにしている。これも神の乗り物を意味しているが、多くは神に供えられてから子どもの玩具になつていていることは、小正月の行事のすべてが豊作を祈る農耕の儀礼であり、多くの作り物が豊作の姿を示す予祝の作り物であるとき、キジ車もまた豊作を祈る供物であつたといえよう。

三、伝承のために

群馬の小正月つくりものは、これまで報告したとおり、これまで「つくりもの」だけで生まれて継承されて来たものでなく、正月行事の中の小正月行事。それも、労働の安全と諸作の豊作を願う心をこめたつくりもの、予祝の行事のつくりものとして作られ、伝えられて来た。ところが急激な社会の変化の中で行事を継承して来た村々の情況が一変し、林業の火は細くなり、米の作付け制限は進み、養蚕もおどろえ、家々は改造されて飾りつけの舞台もなくなって、近代化、合理化の流れの中で伝統行事は急速に消えつつある。そうした中で今回の調査に協力していただいた各家庭は、先祖から伝えられたものだからいまやることはできないとして継続している方々である。しかも、他地区のものについての知識もないから、自らの作るケズリバナを含む小正月つくりものの、群馬県下のまとまりの姿はもとより、その特色や意義について理解しているわけではない。したがって当主の高令化、家の新築で状況が変わると休止、又は廃止ということになりかねない。

対応策としては次のようなことが考えられる。

学習会

イ、市町村公民館等が実施する各種学級、講座等においてテーマにとりあげ、長い伝統と、行事にこめられた意味や、つくりものの意味を知らせる。

ロ、小・中学校・公民館が協力して、世代間交流の会をもち、伝承活動を進める。

ハ、ひな祭り、七夕祭りの集会のように学校行事の中で、「正月行事」を取り入れ、マユダマ作り、ドンドンヤキと結びつけて「小正月づくりもの」を作り、見学を行う。

ニ、子ども会育成会等が中心で行われるドンドンヤキも、大切なふるさと学習としてとらえ、小正月学習も加える。

こうしたことを行なうためには、小正月つくりものについての手引き書、解説書が必要であり、そのためにも報告書の活用がはかられるべきである。

保存措置

市町村教育委員会あるいは資料館（資料室）等で、可能なかぎり現物資料を収集し、展示して、地域内のコレクションを図ることが望ま

しい。その場合に注意すべきは、

イ、特定の個人、家に限らず、作られているものはすべて集めること
ロ、技術の巧拙や仕上がりのよき、製品の大小にこだわらず、悉皆収集をする。

ハ、同じ形のものがいくつになっても、その土地の特色が出せるよう重複して収集すること

ニ、資料には正確な記録（作者名・資料名称・使われ方等）を付けること

ホ、資料一覧表を作ること、できれば製作者別、分類別表も心がけること

県立歴史博物館では、県立博物館から継承した資料収集活動をさらに継続することは当然のことであるが、調査の中に技術保存のためのビデオによる映像記録を加える必要がある。また全資料の記録を整理し、小正月行事の中でのつくりものの集約を進めることが大切である。その際、県内の情報だけではなく、博物館ネットワークを活用して、北海道アイヌのイナウを含めて、可能な限り広くケズリカケ資料（現物資料を含む）を集めての考察も将来の方向とみられる。

小正月つくりものは、毎年の山入りに、行事のために生木を伐採して来て、生乾きのまま利用するために、ひびわれとか、削ったチヂレが折れてしまうことが多く、温気にあうとカビが生えてしまったり、ほこりで汚れることが多く、変色の心配など保存に難点があり、長期保存の方策は確立されていない現状であるが、展示しつつ保存する収蔵方法をとればかなり長期の保存に耐えるとみられるので安定した保存方法の確立に努めることが大切である。

群馬県教育委員会は、県立歴史博物館の「ケズリバナコレクション」を、昭和五十八年二月に県の重要有形民俗文化財に指定し、六十年代から緊急調査を実施して博物館の資料収集への指導を進めてきた。博物館のコレクションは約二千六百点に達し、その内容も県下全城をカバーし、家ごとの一括資料を中心として収集されており、事例ごとに習俗が調査されている。これは全国的にも例を見ない調査であり、貴重なコレクションとなっている。今後の保存と活用のためコレクションの価値にふさわしい評価を与えるために道を開くことが求められる。その上で、報告書ならびにパンフレット等により広く紹介をして民俗行事、小正月つくりものの伝承のために手だてを講じることが必要である。

図版編

「形状で分類したつくりもの」

一、形状からの分類表

(阪本英一)

二、ケズリバナ

(神宮善彦)

三、農のツクリモノ

四、年占用具
五、神像・木刀等

六、マユダマ

（ ）
（ ）
（ ）
（ ）
（ ）
（ ）

〈図版編のみかた〉

1. 写真は、ページの分類表にもとづきそれぞれの代表的なものを掲載した。
2. 表題はカタカナで示したが、わかりやすいように（ ）で本来の意味を掲げたが、これはあくまで一例であり、他説がある場合もある。
3. 説明文の最後の（ ）内は掲載した写真について、その解説が掲載されている県教育委員会発行の無形文化財緊急調査報告書の書名等を表す。
その凡例は以下の通りである。
(吾妻) = 小正月のつくりもの 1 — 吾妻編 — (昭和60年度調査)
(西毛) = 小正月のつくりもの 2 — 西毛編 — (昭和61年度調査)
(利根) = 小正月のつくりもの 3 — 利根編 — (昭和62年度調査)
(中東毛) = 小正月のつくりもの 4 — 中東毛編 —
(昭和63年・平成元年度調査)
この他に以下のようなものがある。
(補充) = 平成元・2年の補充調査による収集資料
(歴博) = 歴史博物館の従来からの収集資料
4. ここに掲載された写真、および上記の報告書でとりあげた「小正月のつくりもの」は、各家庭での小正月行事の終了後、ほとんど全数が県歴史博物館に寄贈されており、同所で保管されている。
5. 前記の各報告書は、増刷したものを県文化財保護課内の文化財保護協会で有料で頒布している。

「群馬の小正月ツクリモノ」資料分類

資料分類名称	小 分 類	資 料 内 容
A ケズリバナ	1. ダン(段)バナ	ナゲバナ、1段、2段、3段、6段、8段、12段、16段、エビスノハナ、地神さま
	2. クルマバナ	クルマバナ、キクバナ、十六ダンギク
	3. ホダレ	ホダレ、チヂレ
	4. ノシ	
	5. そ の 他	ハナカニタ、材料、道具、その他
B 農のツクリモノ	1. 農道具	エンガ、テンガ、サカラ(唐歟)、マンガ、鎌、鋤、鉈、斧、肥桶、臼、杵、ヨツゴ、マネ、熊手、麻尺、農道具一式の目録
	2. 福 俊	タワラ、福俊、アワ俊、ヒエ俊、オカマダワラ、タワラ木
	3. アワボヒエボ	アワボヒエボ(栗穂稗穂)、コンコチ、オカラコ
	4. そ の 他	灰カキ、マナバシ(菜箸)、その他
C 年 占	1. カユカキ棒	カユカキ棒
	2. ハラミ箸	ハラミ箸、大福箸
	3. 筒粥用具	オツフ、筒粥札、お護符、オミキスズ、その他
D 神像・木刀等	1. 木 像	道祖神、カガシ神、作男作女、作大将
	2. 木 刀	カタナ、オキソマラ、オンマラサマ、カンジン棒、ドッコイ棒
	3. 鳥追い祭り用具	ハナ飾り、ハタ、カンジン棒、神様、お祓い
	4. 道祖神祭り用具	ハタ飾り、道祖神さま、太鼓
	5. 水 祝い用具	ツクリモノ、カゴ祝い道具
	6. そ の 他	ゴモットモサマ、オニノハ、その他
E マユダマ	1. マユダマ	マユダマ、十二マユダマ、十六マユダマ、ワタノハナ、鳥、花、臼、ヤサイモノ
	2. モチバナ	モチバナ、田の神様、桑の葉、機神様、サギノミヤサマ
	3. マユダマ木	ボク、カゴ木、原料(十六マユダマ)
	4. そ の 他	ハナガシ、木型、その他、お札(虚空藏様)
F 雄子車	1. 雄子車	雄子車
G そ の 他	1. 便所神様	セッチンビナ、セッチンヨメゴ、ウッサンミョウサマ 便所神の幣束
	2. センビキ粥	センビキ粥、ツッコ
	3. そ の 他	イボジメ、カカシ、正月棚、その他 膳椀ダルマ

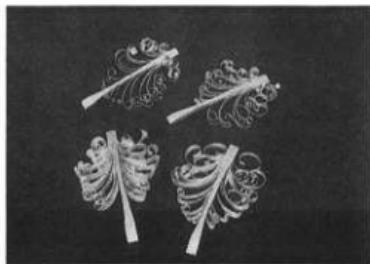
A ケ ズ リ バ ナ

県内で、ケズリバナをはじめ、ハナ・ホダレ・カキバナなどと呼ばれる削り掛けは、「お百姓の正月」とも言われる小正月のモノツクリの代表的な儀礼用具である。

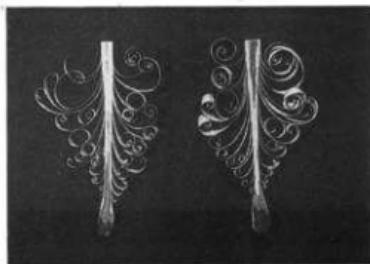
ケズリバナには、新年に訪れる神の依代として、紙が普及するまで御幣の役割を果してきたと思われる形（木幣）を示すものが見られる。削り掛けの原点とも考えられる資料で、幣束とケズリバナの類似性をよりよく反映している。

正月の若木迎え、山入りの日に採取したヌルデ・ミズブサ・ニワトコ等のハナ木を材料として、木の側面を刃物で花弁状に削り出し、これを年神様をはじめ、メ飾りをした家内外の神々などに供える。木の片側または両側に段状に、1段から16段にもなるハナを削り出す段バナ、車または菊花状にハナをつけ、削り竹の先端などに差し込んだクルマバナ、非常に細かに螺旋状に長く削り垂らした稲穂を連想させるチヂレ、螺旋状のちぢれを全くつけず、玄関口に長く吊り下げられるノシなど、その形には、多種多様なものが見られる。それらは、幣束や花をはじめ、稲穂、葦、朝日などを特長的に表現したものであり、小正月の全体的な象徴として、豊穣への願いが直接的に込められたツクリモノと言える。

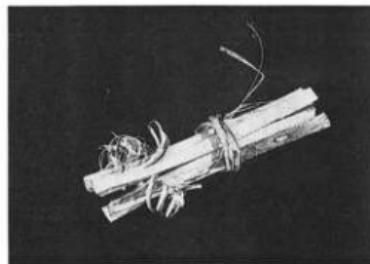
1 ダン(段)バナ



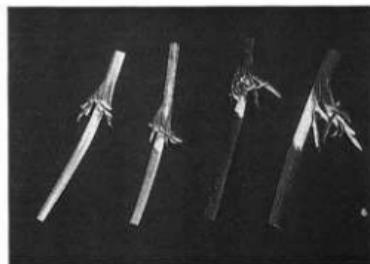
ハナ(花)
吾妻郡六合村入山 山本直義氏製作
全長 19.8cm 幅 13.0cm 他 (吾妻)



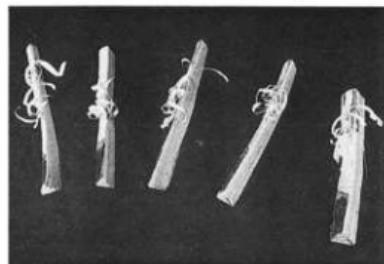
ハナ(花)
吾妻郡六合村入山 中沢一孝氏製作
全長 35.5cm 幅 21.5cm 他 (吾妻)



クバリバナ(配り花)
利根郡水上町栗沢 阿部 隆氏製作
全長 22.2cm 他 (利根)



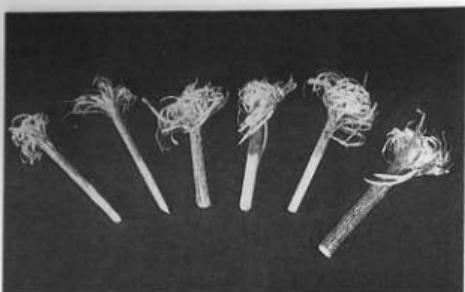
ハナ(花)
多野郡上野村樺原 滝上夏男氏製作
全長 22.5cm 幅 1.8cm 他 (西毛)



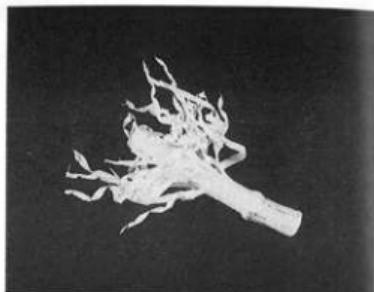
カキバナ(搔き花)
利根郡水上町寺間 山田利治氏製作
全長 21.5cm 他 (利根)



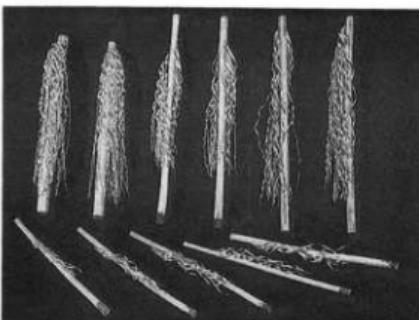
ハナ(花)
佐波郡玉村町箱石 猪野松次郎氏製作
全長 31.0cm 他 (中東毛)



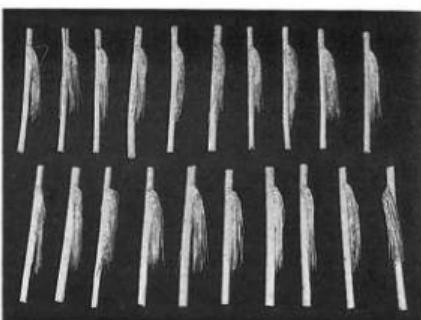
ケーダレ（花）
甘楽郡下仁田町上小坂 斎藤治郎氏製作
全長 16.0 cm 径 0.8 cm 他 （西毛）



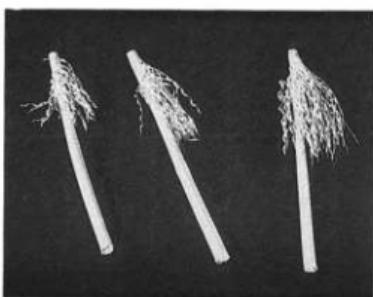
カドカザリ（門飾り）
伊勢崎市上之宮町 岡本武夫氏製作
全長 17.0 cm 径 2.0 cm 他 （中東毛）



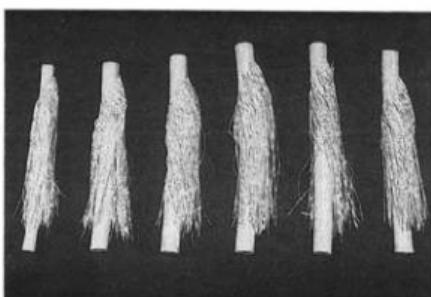
ハナ（花）
吾妻郡中之条町大塚 松井 次郎氏製作
全長 49.0 cm 他 （吾妻）



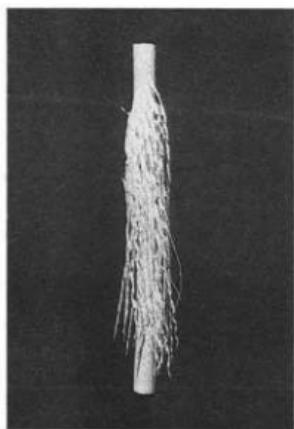
ナゲバナ（投げ花）
北群馬郡小野上村村上 石川広吉氏製作
全長 18.2 cm 他 （吾妻）



ハナ（花）
利根郡新治村入須川 富沢佳年氏製作
全長 24.5 cm 径 2.2 cm 他 （利根）

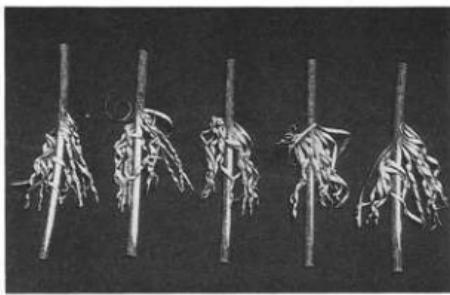


オオバナ（大花）
甘楽郡甘楽町造石 浅香英雄氏製作
全長 24.5 cm 径 2.2 cm 他 （西毛）



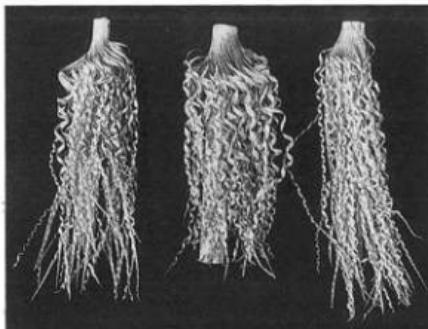
コバナ（小花）

甘楽郡甘楽町造石 浅香英雄氏製作
全長 17.0 cm 径 1.1 cm (西毛)



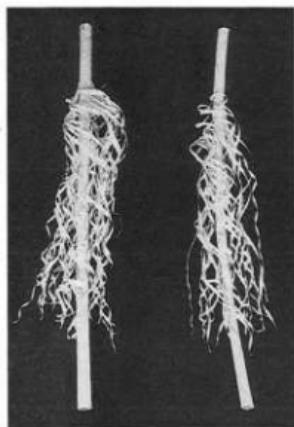
ハナ（花）

群馬郡榛名町下里見 里見又市氏製作
全長 22.0 cm 径 1.0 cm 他 (西毛)



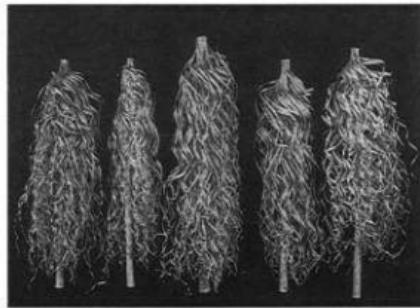
ハナ（花）

利根郡利根村園原 富岡利雄氏製作
全長 32.4 cm 径 3.6 cm 他 (利根)



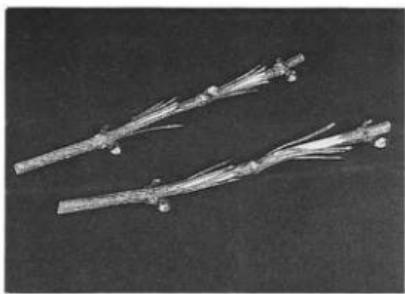
オオバナ（大花）

碓氷郡松井田町新堀 上原富次氏製作
全長 38.0 cm 径 1.2 cm 他 (西毛)

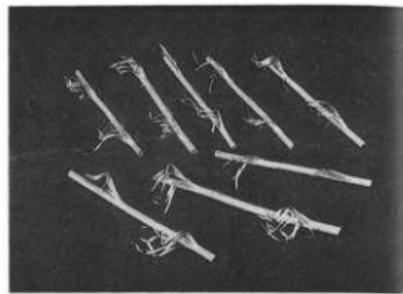


カキバナ（搔き花）

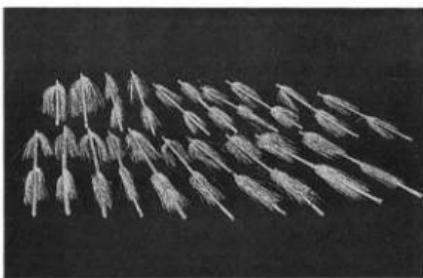
藤岡市金井 関沼豊太郎氏製作
全長 45.5 cm 径 2.7 cm 他 (西毛)



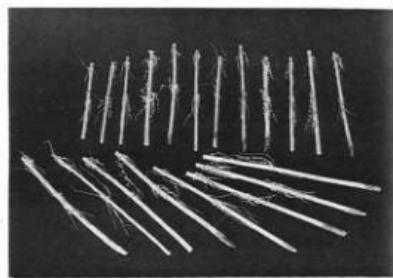
ハナ（花）
藤岡市金井 関沼円蔵氏製作
全長 33.7 cm 径 1.4 cm 他 (西毛)



ハナ（花）
北群馬郡子持村上白井 後藤省三氏製作
全長 29.8 cm 他 (吾妻)



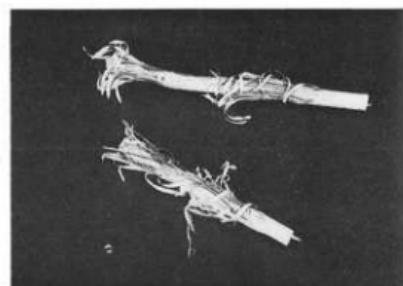
ハナ（花）
吾妻郡吾妻町松谷 野口保雄氏製作
全長 34.9 cm 他 (吾妻)



ナゲバナ（投げ花）
吾妻郡中之条町五反田 唐沢姫雄氏製作
全長 34.0 cm 他 (吾妻)



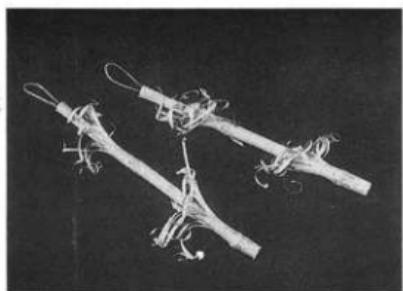
ジジンサマノハナ (地神様の花)
北群馬郡小野上村村上 石川広吉氏製作
全長 42.0 cm (吾妻)



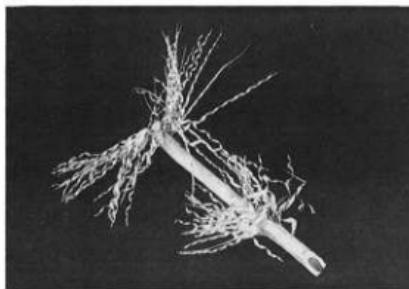
ニダンノハナ (二段の花)
勢多郡柏川村田 石橋藤三郎氏製作
全長 18.7 cm 他 (中東毛)



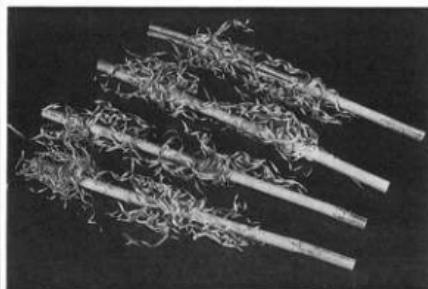
ハナ（花）
勢多郡大胡町茂木 林 利藏氏製作
全長 29.2 cm 径 2.8 cm 他 （中東毛）



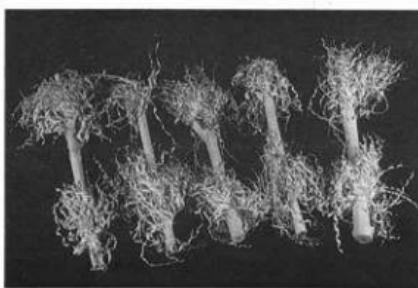
ハナ（花）
新田郡蔽塚本町大久保 永田隆一氏製作
全長 33.2 cm 径 1.4 cm 他 （中東毛）



ハナ（花）
勢多郡黒保根村下田沢 大塚耕作氏製作
全長 39.3 cm 径 2.1 cm （中東毛）



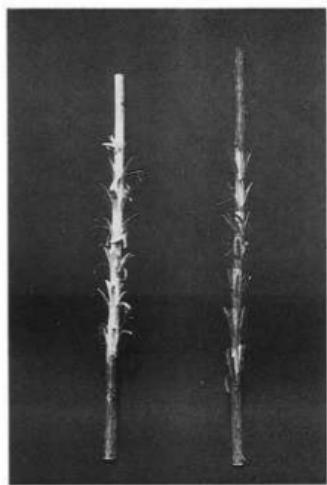
ニダンバナ（二段花）
前橋市飯土井町 石綿信雄氏製作
全長 35.8 cm 径 2.6 cm 他 （中東毛）



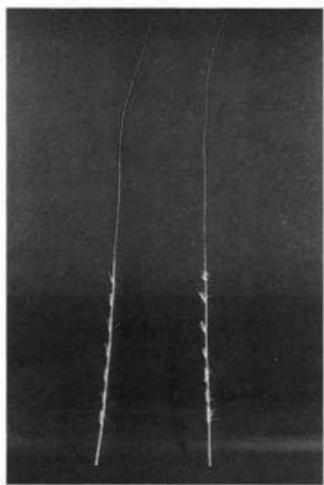
ハナ（花）
勢多郡宮城村市之関 角田林作氏製作
全長 36.0 cm 他 （中東毛）



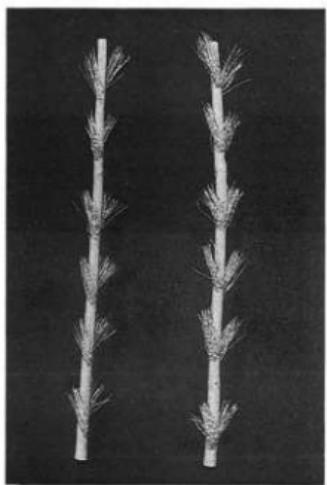
サンダンバナ（三段花）
館林市日向町 吉田嶽藏氏製作
全長 40.7 cm 径 2.0 cm 他 （中東毛）



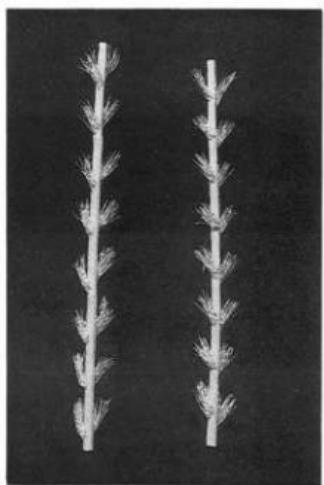
ハナ（花）
多野郡中里村神ヶ原 高橋登美治氏製作
全長 50.2 cm 径 1.5 cm 他 （西毛）



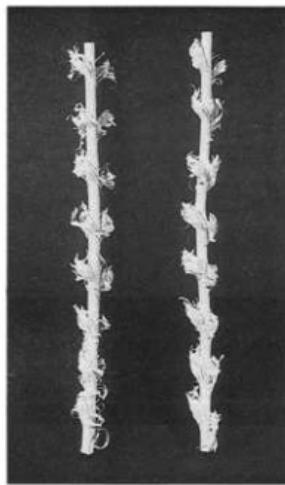
ジュウロクダンバナ（十六段花）
北群馬郡小野上村村上 石川広吉氏製作
全長 153.5 cm 他 （吾妻）



ジュウニダンバナ（十二段花）
甘楽郡甘楽町造石 浅香英雄氏製作
全長 56.7 cm 径 1.7 cm 他 （西毛）

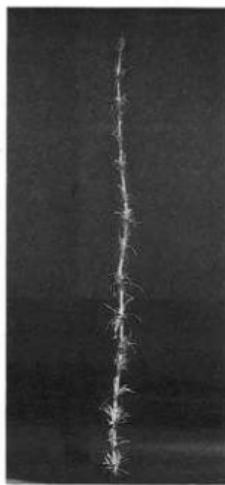


ジュウロクダンバナ（十六段花）
甘楽郡甘楽町造石 浅香英雄氏製作
全長 64.7 cm 径 1.7 cm 他 （西毛）



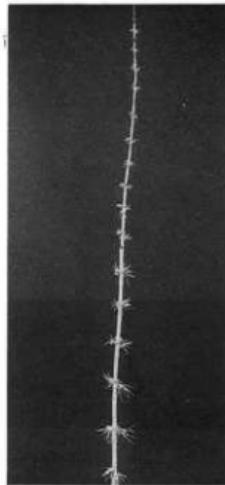
ジュウロクケーダレ（十六ケーダレ）
甘楽郡下仁田町上小坂

斎藤治郎氏製作
全長 53.2 cm 径 1.6 cm 他（西毛）

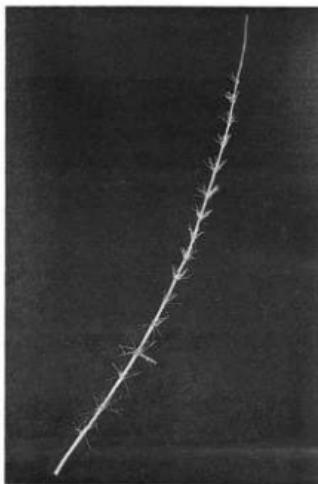


ジュウロクダンノハナ
(十六段の花)

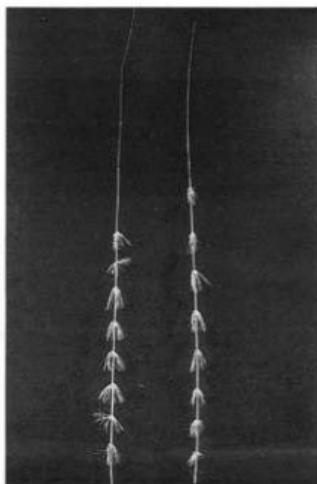
佐波郡赤堀町今井
板野豊作氏製作
全長 155.0 cm (中東毛)



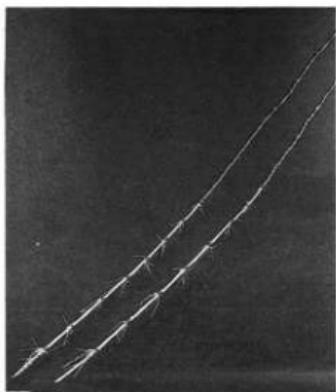
ジュウロクダンバナ
(十六段花)
勢多郡黒保根村下田沢
尾池住夫氏製作
全長 307.0 cm (中東毛)



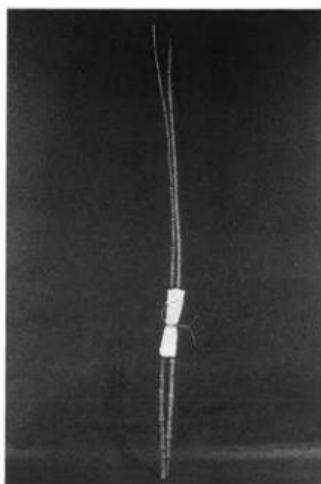
ジュウロクバナ（十六花）
北群馬郡子持村上白井 後藤省三氏製作
全長 200.0 cm (吾妻)



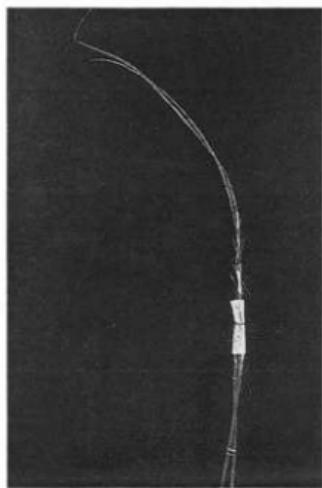
ジュウロクバナ（十六花）
吾妻郡吾妻町松谷 野口保雄氏製作
全長 189.0 cm 他 (吾妻)



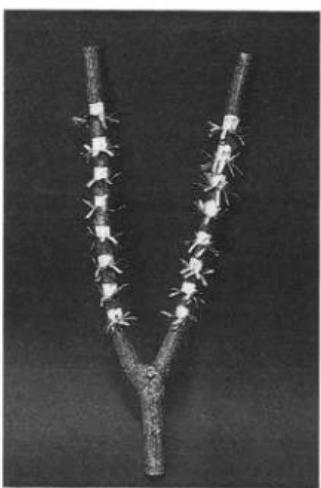
ジュウロクバナ（十六花）
吾妻郡中之条町五反田 唐沢姫雄氏製作
全長 277.0 cm 他 (吾妻)



ジュウロクバナ（十六花）
藤岡市金井 関沼円藏氏製作
全長 168.0 cm 他 (西毛)

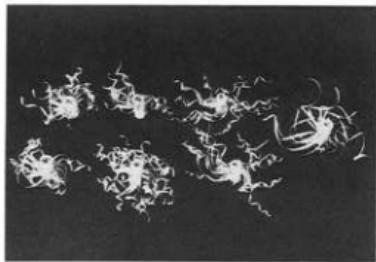


ハナ（花）
高崎市上小塙町 清水儀平氏製作
全長 194.0 cm 他 (補充)

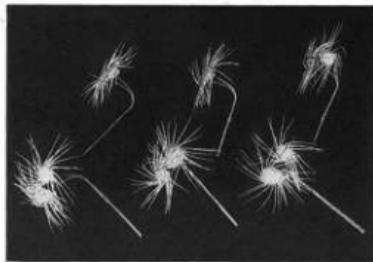


ジュウロクテンジン（十六テンジン）
多野郡上野村柏原 滝上夏男氏製作
全長 47.0 cm (西毛)

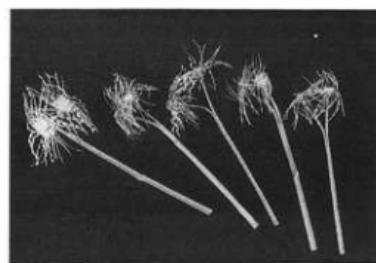
2 クルマバナ



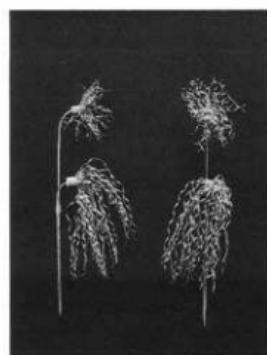
ハナ（花）
利根郡白沢村尾合 山田 勝氏製作
7.0 × 10.0 cm 他



クルマバナ（車花）
北群馬郡小野上村村上 石川広吉氏製作
全長 23.4 cm ハナ径 16.5 cm



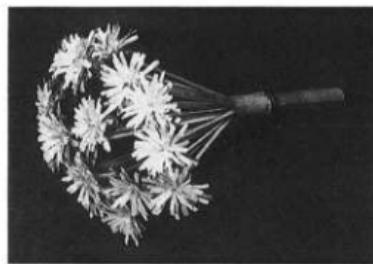
クルマッバナ（車花）
吾妻郡中之条町五反田 富沢義真喜氏製作
全長 40.0 cm ハナ径 16.5 cm 他



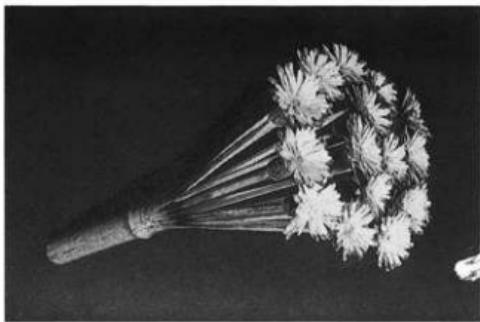
カザリバナ（飾り花）
北群馬郡子持村上白井 全長 cm 他
後藤省三氏製作
(吾妻)



ハナ（花）
山田郡大間々町小平 赤石恒男氏製作
全長 39.5 cm ハナ径 26.0 cm 他（中東毛）

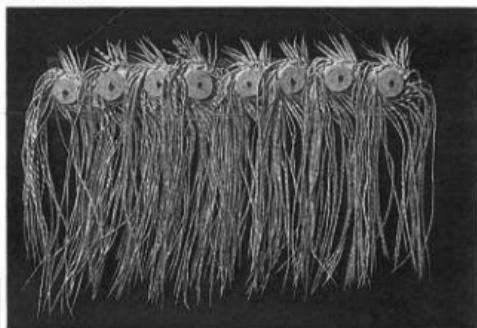


ニジュウバナ（二十花）
多野郡上野村樺原 滝上夏男氏製作
全長 36.0 cm 幅 29.0 cm 径 2.5 cm (西毛)



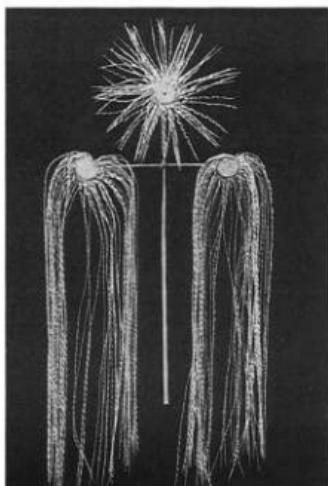
ジュウロクバナ（十六花） 滝上 夏男氏製作

多野郡上野村榎原
（西毛）
全長38.5cm 幅20.0cm 径2.8cm



ハッショウジン（八将神）

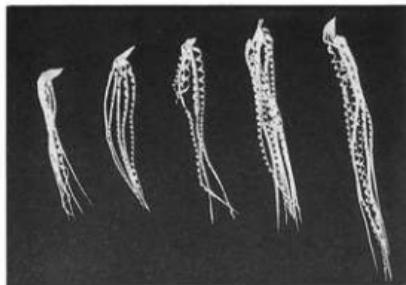
北群馬郡子持村村上 石川広吉氏製作
33.5×52.0cm
（西毛）



ハナ（花）

勢多郡黒保根村上田沢 小池幸市氏製作
全長 70.5cm
（中東毛）

3 チ デ レ



ハナ（花）

利根郡利根村蘭原
全長 32.3 cm 他

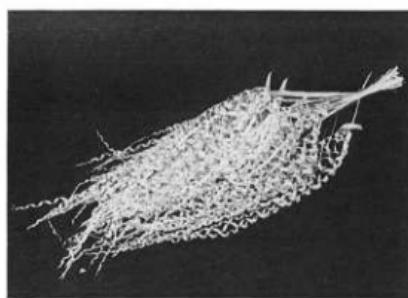
富岡利雄氏製作
(利根)



チヂレバナ（チヂレ花）

利根郡片品村土出
全長 55.0 cm 他

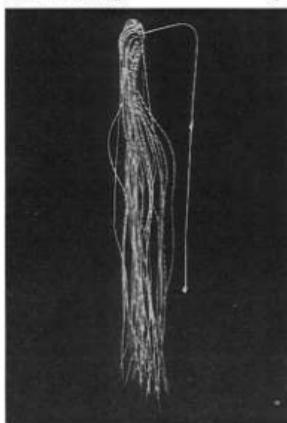
高山岩造氏製作
(利根)



チヂレバナ（チヂレ花）

利根郡片品村土出
全長 58.0 cm 他

チヂレバナ（チヂレ花）
利根郡片品村土出
全長 33.0 cm
径 9.0 cm
高山岩造氏製作
(利根)



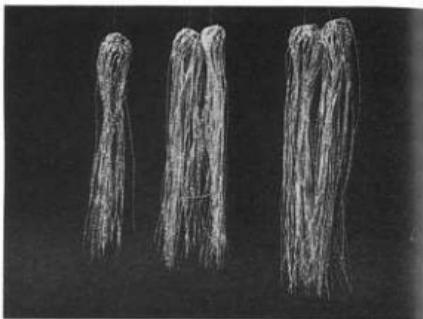
ホダレ（穂垂れ）

吾妻郡中之条町五反田
富沢義真喜氏製作
ハナ長 67.0 cm ハナ径 3.2 cm
柄長 46.0 cm (吾妻)

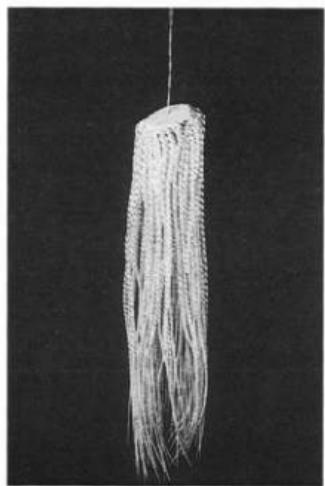




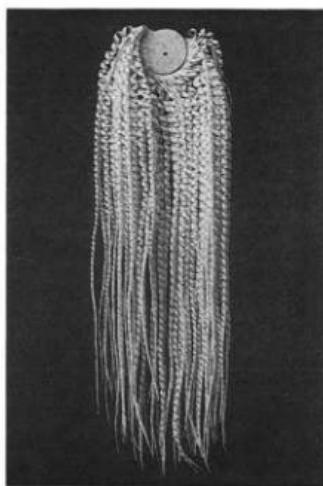
チテレバナ（チテレ花）
利根郡利根村園原 富岡利雄氏製作
全長 61.0 cm 径 3.2 cm
（利根）



ツルシバナ（吊し花）
北群馬郡小野上村村上 石川広吉氏製作
全長 47.5 cm 他
（吾妻）

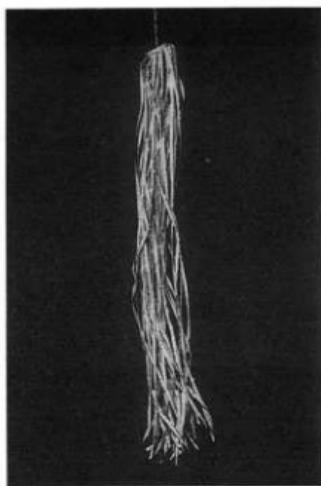


カキバナ ツル（搔き花 鶴）
吾妻郡中之条町大塚 飯塚貞文氏製作
63.0 × 9.5 cm
（補充）

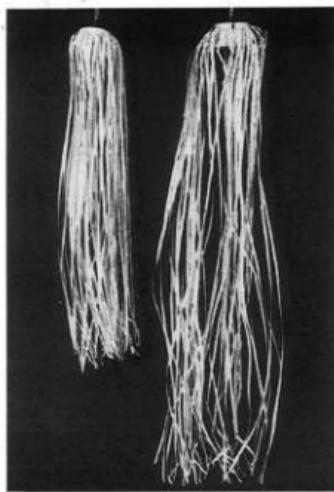


カキバナ カメ（搔き花 亀）
吾妻郡中之条町大塚 飯塚貞文氏製作
60.0 × 15.0 cm
（補充）

4 ノシ



ノシ（伸し）
吾妻郡中之条町五反田 富沢義真喜氏製作
全長 80.0 cm 径 5.4 cm
（吾妻）

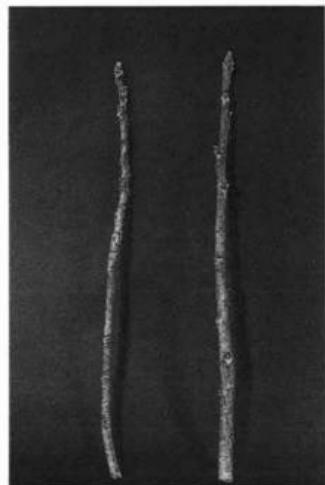


ノシ（伸し）
利根郡片品村土出 高山岩造氏製作
全長 83.0 cm 径 1.5 cm
（利根）

5 そ の 他



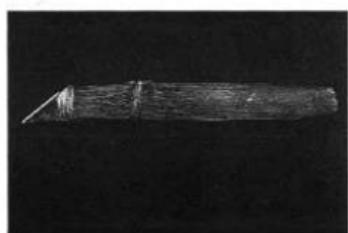
ホダレナタ（穂垂れ鉈）
吾妻郡吾妻町三島 丸橋祐男氏寄贈
全長20.3cm 刃部8.0×5.5cm (歴博)



クルミノシンメ（クルミの新芽）
利根郡水上町栗沢 阿部 隆氏製作
全長43.5cm 他 (利根)



ハナカキナタ（花掻き鉈）
勢多郡赤城村滝沢 岩田昭三氏寄贈
全長25.3cm 刃部16.2cm
" 21.5cm " 9.3cm (歴博)



ハナカキ（花掻き）
利根郡片品村土出 高山岩造氏寄贈
全長19.2cm 刃部3.2cm (歴博)

B 農のツクリモノ

小正月行事は、その年の農作業の豊かなみのりや農作業の形を示し豊作を祈願する予祝行事が大きな比重を占めている。

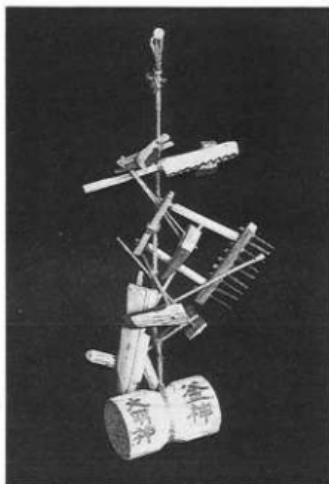
「農の正月」ともいわれる所以である。

県内では、農道具の模造品をはじめ、福俵や栗穂^{あわほ}稗穂^{ひば}などの製作が知られている。オッカド（ヌルデ）の木を用いて、テンガ（歟）・エンガ（鋤）をはじめ、鉈・斧・鋸・ツルハシ・馬歎・臼・杵などの農道具を作り、刃の部分を墨で塗つて仕上げている。特に、吾妻地域に見られる麻ヒモやワラットにさげて飾るところや、六合村のように農具一式の目録を半紙に書いているところなどが注目される。作神としての釜神様への供え物となるが、地域の実際の農具の型がツクリモノにも反映され興味深いものがある。

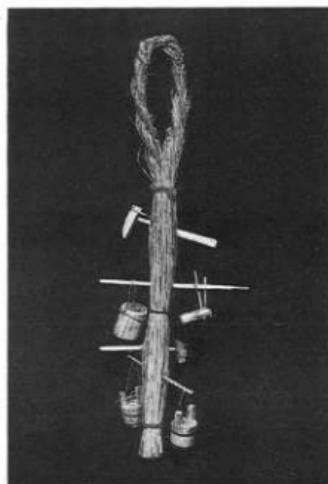
また、オッカドの木を三本または五本に束ね、切り口に「七福神」や「米、麦、大豆、小豆、蚕」などと、めでたい言葉や作物の名を書きつけるところも多い。農作祈願のタワラとなる。

青竹の先を割り、その先端にアワヒエと模したオッカドの木を差し込み、堆肥を積み上げた上に立てるが、アワヒエという特定の作物に限定していた子祝としてとらえられるものもある。アワボヒエボに削りを入れることもあり、竹の先端に一段のハナを付けたりした。

1 農道具



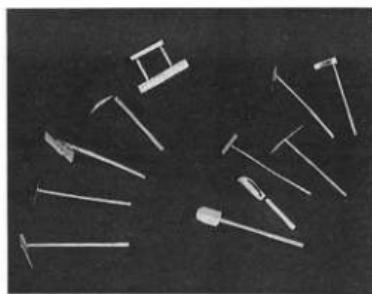
ノウグイッキ (農具一式)
吾妻郡吾妻町松谷 小池喜次郎氏製作
全長 39.0 cm (吾妻)



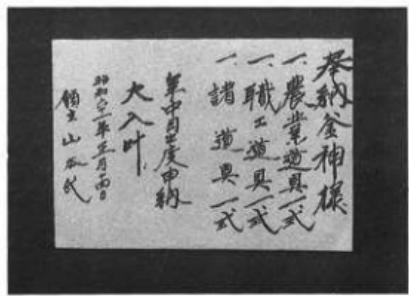
ノウグイッキ (農具一式)
吾妻郡吾妻町松谷 野口保雄氏製作
全長 64.5 cm (吾妻)



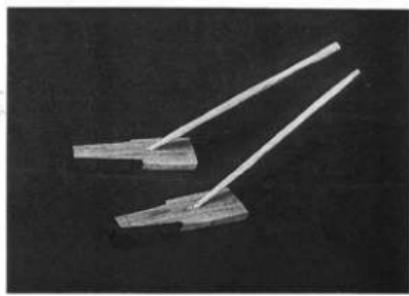
ノウグ (農具)
多野郡中里村神ヶ原 高橋登美治氏製作
高さ 33.0 cm 幅 52.0 cm (西毛)



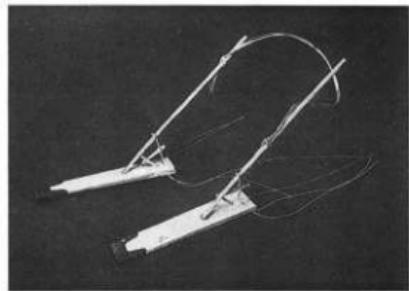
ノウグ (農具)
吾妻郡中之条町大塚 松井次郎氏製作
全長 19.5 cm 他 (吾妻)



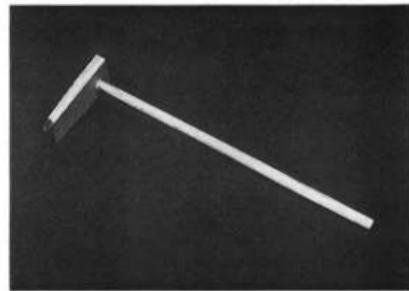
ホウノウカマガミサマ（奉納釜神様）
吾妻郡六合村入山 山本直義氏製作
18.1×25.6cm (吾妻)



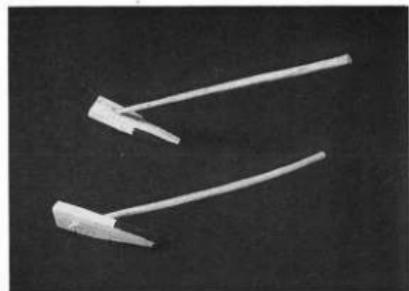
エンガ（柄鍔）
甘楽郡甘楽町造石 浅香英雄氏製作
11.0×3.3×17.3cm 他 (西毛)



エンガ（柄鍔）
碓氷郡松井田町新堀 上原富次氏製作
15.8×3.0×21.7cm 他 (西毛)



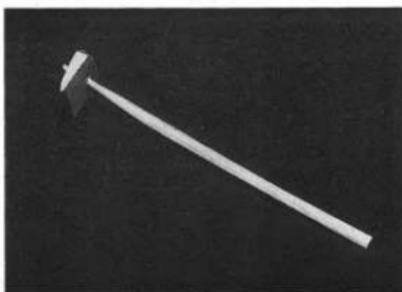
トウグワ（唐鍔）
甘楽郡甘楽町造石 浅香英雄氏製作
全長 19.0cm (西毛)



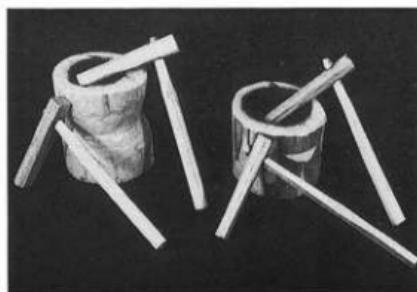
テンガ（鍔）
甘楽郡甘楽町造石 浅香英雄氏製作
8.3×2.5×22.2cm (西毛)



サンチュウテンガ（山中鍔）
甘楽郡下仁田町青倉 神戸国吉氏製作
全長 27.0cm 柄径 0.5cm 刃部 9.1×3.5cm
(西毛)



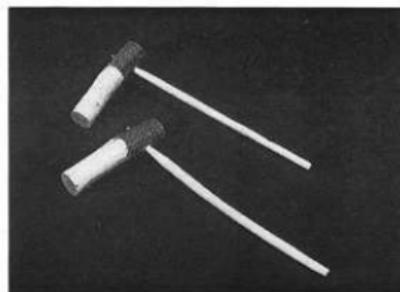
クサカキ（草搔き）
甘楽郡甘楽町造石
 $3.3 \times 3.3 \times 20.5\text{ cm}$
浅香英雄氏製作
(西毛)



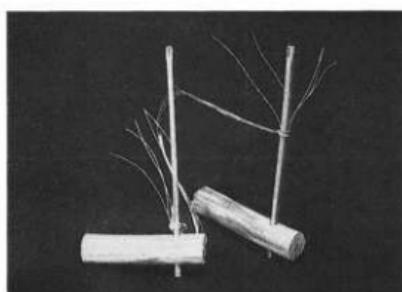
ウスキネ（臼杵）
利根郡新治村入須川 富沢佳年氏製作
(臼)高 5.7 cm 径 5.5 × 6.0 cm
(杵)全長 11.0 cm 他
(利根)



キネ（杵）
多野郡上野村柏原
全長 18.8 cm
滝上夏男氏製作
(西毛)



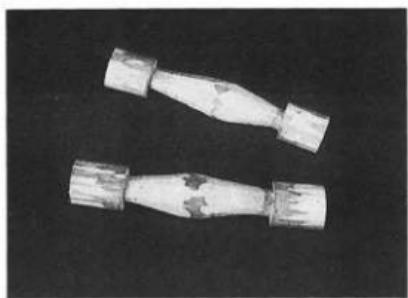
キネ（杵）
甘楽郡甘楽町造石
浅香英雄氏製作
(西毛)
全長 18.2 cm



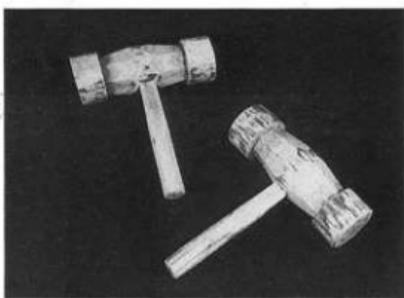
キネ（杵）
碓氷郡松井田町新堀
全長 17.5 cm
上原富夫氏製作
(西毛)



タテギネ（立杵）
多野郡上野村柏原 滝上夏男氏製作
全長 24.6 cm 径 5.3 cm
(西毛)



タテギネ（立斧）
勢多郡黒保根村下田沢 大塚耕作氏製作
全長 27.1 cm 柄径 4.9 cm
(中東毛)

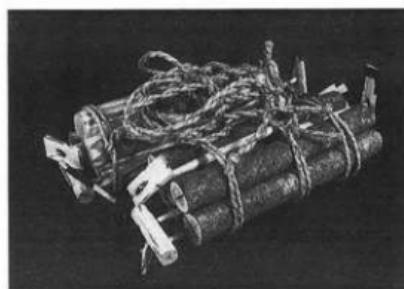


ウチテノコヅチ（打ち出の小槌）
勢多郡東村小夜戸 新井 豊氏製作
全長 25.5 cm 柄径 2.9 cm 他
(中東毛)

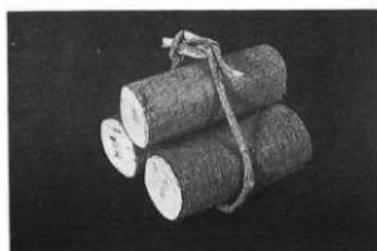
2 福 俵



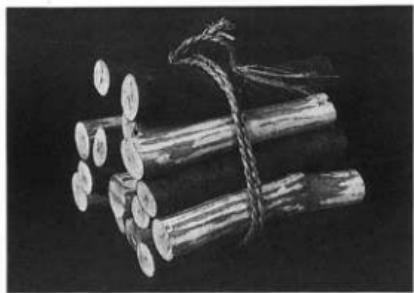
コメダワラ ヒエダワラ（米俵 稗俵）
吾妻郡吾妻町松谷 野口保雄氏製作
全高 43.0 cm 全長 35.5 cm
(吾妻)



アワダワラ ヒエダワラ（粟俵 稗俵）
吾妻郡嬬恋村門貝 滝沢正男氏製作
全高 35.0 cm 全長 47.0 cm
(吾妻)



フクダワラ（福俵）
多野郡万場町万場 斎藤茂三郎氏製作
全高 8.6 cm 全長 11.7 cm
(西毛)



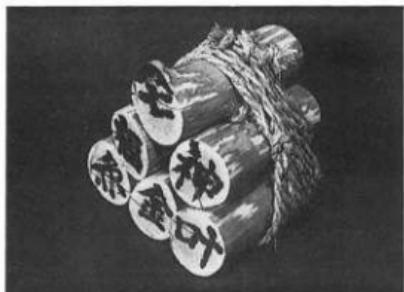
フクダワラ（福俵）

利根郡新治村東峰須川 本多恵作氏製作
全高 22.5 cm 全長 26.0 cm (利根)



フクダワラ（福俵）

多野郡上野村榎原 流上夏男氏製作
全高 22.2 cm 全長 21.5 cm (西毛)



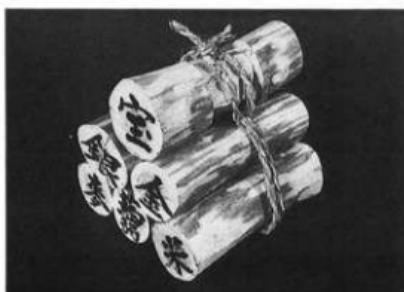
フクダワラ（福俵）

多野郡上野村神ヶ原 高橋登美治氏製作
全高 24.8 cm 全長 22.0 cm (西毛)



フクダワラ（福俵）

甘楽郡南牧村大日向 市川太平氏製作
全高 13.0 cm 全長 14.5 cm (西毛)



フクダワラ（福俵）

甘楽郡下仁田町上小坂 斎藤治郎氏製作
全高 17.2 cm 全長 18.0 cm (西毛)



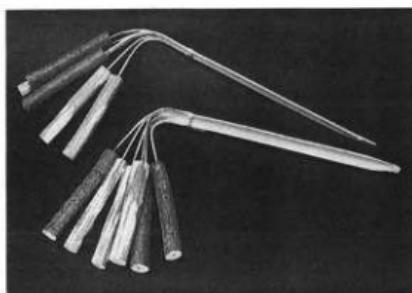
フクダワラ（福俵）

利根郡品村土出 高山岩造氏製作
全高 15.0 cm 全長 16.5 cm (利根)

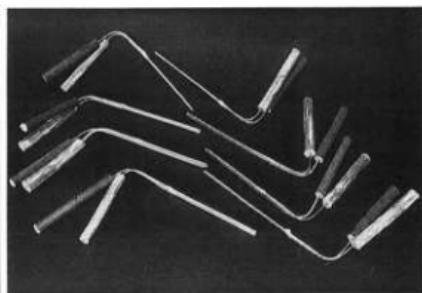


フクダワラ（福俵）
利根郡片品村土出 梅沢千代松氏製作
全高 17.8 cm 全長 20.5 cm (利根)

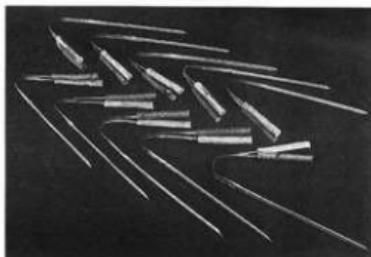
3 アワボヒエボ



アワボヒエボ（栗穂稗穂）
多野郡中里村神ヶ原 高橋登美治氏製作
全長 75.0 cm 他 (西毛)



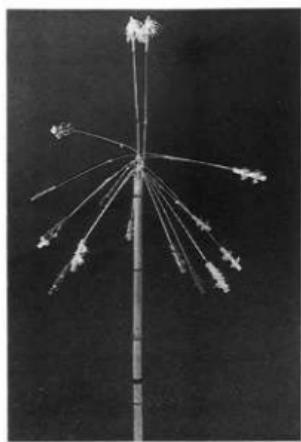
カッカラボッコ（栗穂稗穂）
多野郡中里村神ヶ原 高橋登美治氏製作
全長 47.0 cm 他 (西毛)



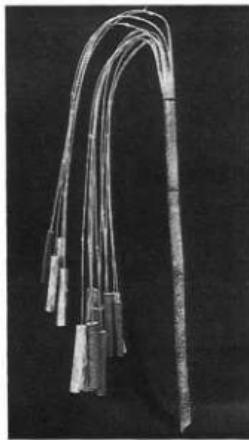
アーボヒエボ（栗穂稗穂）
多野郡万場町万場 斎藤茂三郎氏製作
全長 62.0 cm 他



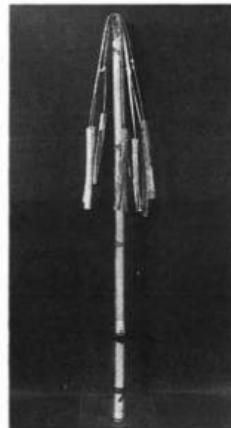
アワボヒエボ（栗穂稗穂）
北群馬郡子持村上白井
後藤省三氏製作
全高 101.0 cm (吾妻)



アーボヒーボ（栗穂稗穂）
吾妻郡吾妻町松谷
野口保雄氏製作
全高 198.0 cm (吾妻)



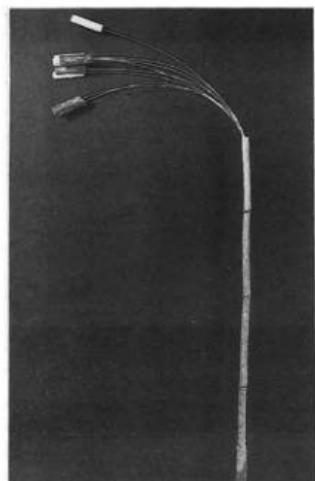
アーボヒーボ（栗穂稗穂）
吾妻郡中之条町五反田
唐沢 勉氏製作
全高 151.0 cm (吾妻)



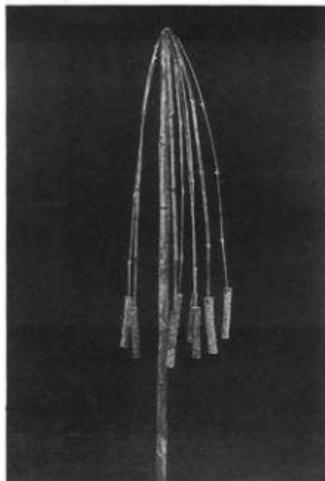
アーボヒーボ（栗穂稗穂）
吾妻郡吾妻町松谷
小池 喜次郎氏製作
全高 127.0 cm (吾妻)



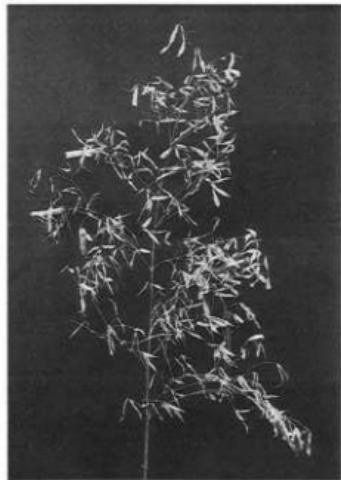
アワボヒエボ（栗穂稗穂）
多野郡上野村楨原
滝上 夏男氏製作
全高 120.0 cm (西毛)



アーボヒーボ（栗穂稗穂）
利根郡新治村羽場 原沢一郎氏製作
全高 202.0 cm (利根)



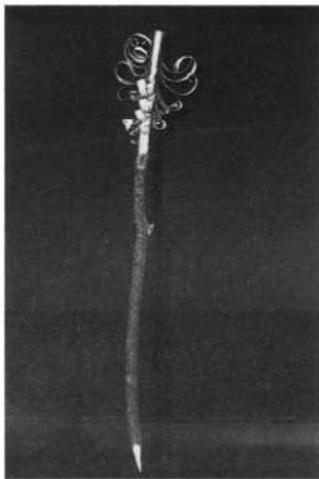
アーボヒーボ（栗穂稗穂）
勢多郡赤城村見立 烏山長寿氏製作
全高 178.0 cm (中東毛)



アワボヒエボ（栗穂稗穂）
沼田市佐山町 戸部一氏製作
全高 210.0 cm (利根)

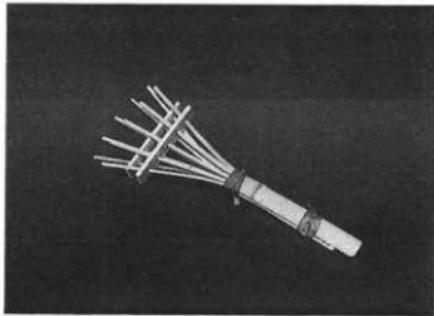


アーボヒーボ（栗穂稗穂）
沼田市下川田町 田中長重氏製作
全高 141.0 cm (利根)



タイヒノハナ（堆肥の花）
吾妻郡六合村入山 中沢一孝氏製作
全高 100.5 cm 幅 19.5 cm （吾妻）

4 そ の 他



ハイカキ（灰搔き）
多野郡万場町塩沢 高橋貞義氏製作
全長 30.0 cm （歴博）

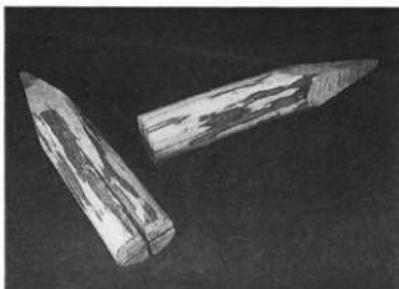
C 年 占 用 具

小正月の行事の中にその年の農作物の豊凶を占う年占がある。十五日に小豆粥を飲いて粥搔き棒で搔きまわし、米粒のつき方でその年の作柄を占う行事が各地に伝えられる。粥搔き棒は、オカカドなどの木を適当な長さに切り、下部を杭状にとがらせ、上部はナタで四つ割りとして作る。そこへは、マニ玉や餅きれを挟むところも多い。粥を搔きまわす際に唱えことがなされ、田の代搔きに見立てるところもある。終わると粥搔き棒は半紙に包まれて神棚に上げられ、苗代づくりの際に水口に立てたりする。

十五日粥を食べるためを作るハラミ箸は、真中の部分が太く作られたもので、穂の穂ばらみの状態を示したものといふ。十五日粥は、どんなに熱くとも吹いて食べてはいけないといわれ、吹いて食べると「田植に風が吹く」という。水上町では、クルミの木で作ったハラミ箸を十文字に組合せてワラで結び、屋根裏に投げ上げたところもある。箸は家族分の組数を作るところが多いが、それに一本（ハシ）を加えたり、神様の分まで作り、上げるところも見られる。

また、ヨシを編んでオツツを作り、一月十四日の夜、このツツに入ったお粥の多少で作物の出来を占う恋恋村鍵原神社の簡粥神事なども見られる。

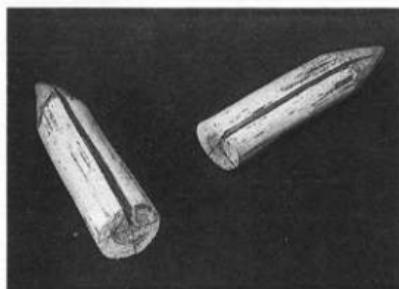
1 力 ユ カ キ 棒



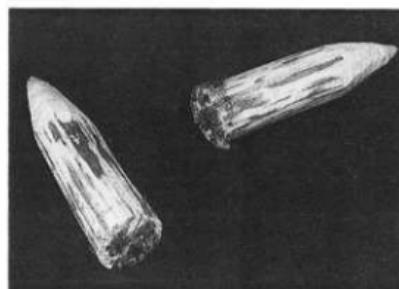
カユカキボウ（粥搔き棒）
北群馬郡子持村上白井 後藤省三氏製作
長 52.7 cm 径 10.2 cm 他 (吾妻)



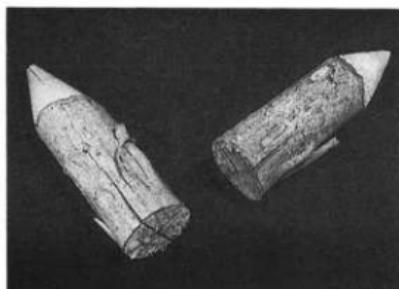
カユカキボウ（粥搔き棒）
吾妻郡吾妻町松谷 野口保雄氏製作
長 23.3 cm 径 4.7 cm 他 (吾妻)



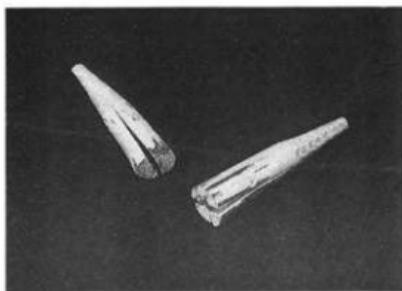
ケエカキボウ（粥搔き棒）
吾妻郡中之条町大塚 松井次郎氏製作
長 27.0 cm 径 5.7 cm 他 (吾妻)



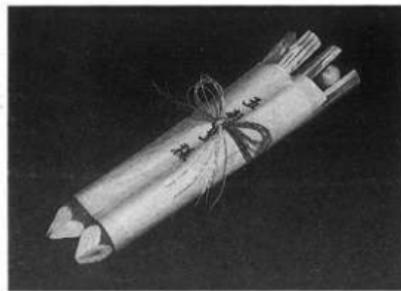
カユカキボウ（粥搔き棒）
吾妻郡中之条町五反田 唐沢姫雄氏製作
長 25.0 cm 径 5.8 cm 他 (吾妻)



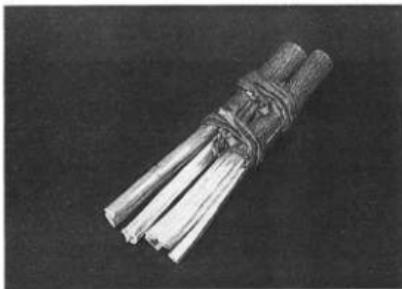
カユカキボウ（粥搔き棒）
吾妻郡吾妻町松谷 小池喜次郎氏製作
長 23.0 cm 径 6.8 cm 他 (吾妻)



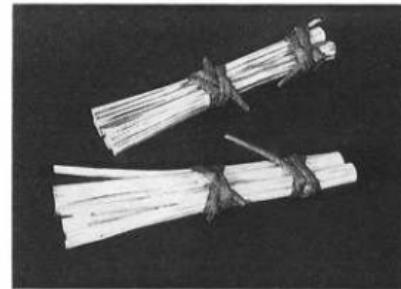
カユカキボウ（粥搔き棒）
北群馬郡小野上村村上 石川広吉氏製作
長 15.2 cm 径 3.1 cm 他 (吾妻)



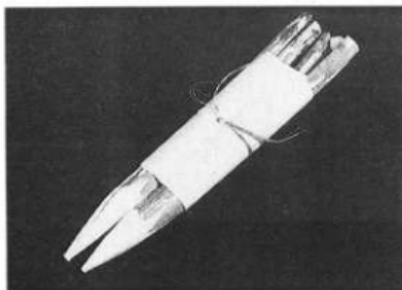
カユカキボウ（粥搔き棒）
安中市鷺宮 森泉七四郎氏製作
長 34.0 cm 幅 10.2 cm (西毛)



カユカキボウ（粥搔き棒）
多野郡中里村神ヶ原 高橋登美治氏製作
長 26.4 cm 径 3.0 cm 他 (西毛)



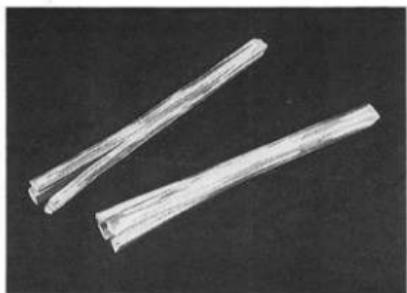
カユカキボウ（粥搔き棒）
多野郡万場町万場 斎藤茂三郎氏製作
長 28.5 cm 他 (西毛)



カユカキボウ（粥搔き棒）
藤岡市金井 関沼円蔵氏製作
長 49.5 cm 他 (西毛)

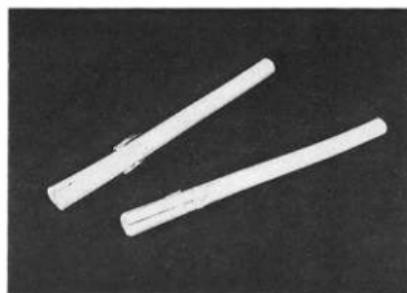


カユカキボウ（粥搔き棒）
甘楽郡南牧村大日向 市川太平氏製作
長 42.0 cm 径 4.0 cm 他 (西毛)



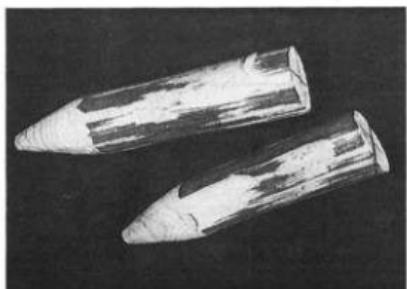
カユカキボウ（羽搔き棒）

吾妻郡嬬恋村門貝 龍沢正男氏製作
長 48.7 cm 径 4.8 cm 他 (吾妻)



カユカキボウ（羽搔き棒）

利根郡利根村穴原 中沢信英氏製作
長 27.5 cm 径 2.5 cm 他 (利根)



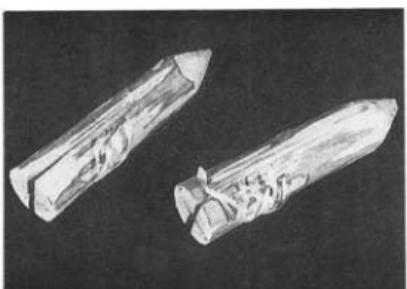
カユカキボウ（羽搔き棒）

利根郡月夜野町小川 田村秀夫氏製作
長 28.5 cm 径 6.5 cm 他 (利根)



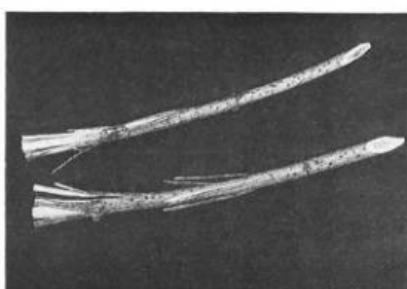
カユカキボウ（羽搔き棒）

利根郡水上町栗沢 阿部 隆氏製作
長 21.5 cm 径 4.0 cm 他 (利根)



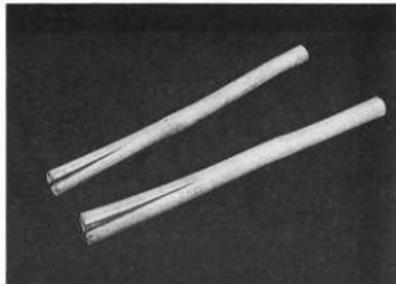
カユカキボウ（羽搔き棒）

利根郡新治村入須川 富沢佳年氏製作
長 26.0 cm 径 6.4 cm 他 (利根)

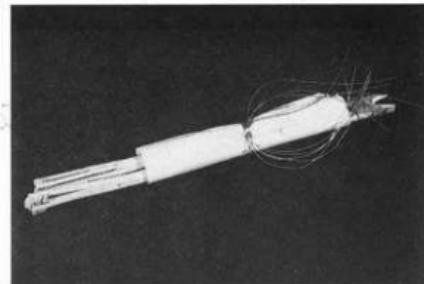


カユカキボウ（羽搔き棒）

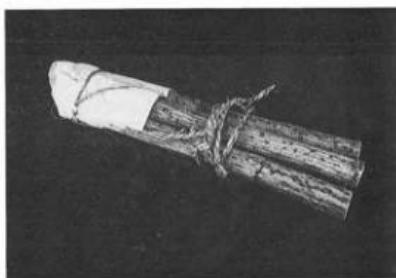
新田郡笠懸町阿左美 藤生作十郎氏製作
長 63.0 cm 径 7.0 cm 他 (中東毛)



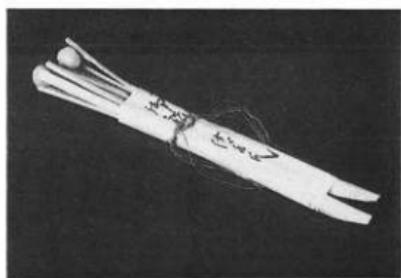
カユカキボウ（粥搔き棒）
勢多郡富士見村米野 柳井久雄氏製作
長 34.2 cm 径 3.0 cm 他 (中東毛)



カユカキボウ（粥搔き棒）
前橋市荻窪町 青木博久氏製作
長 43.5 cm 径 2.2 cm 他 (中東毛)

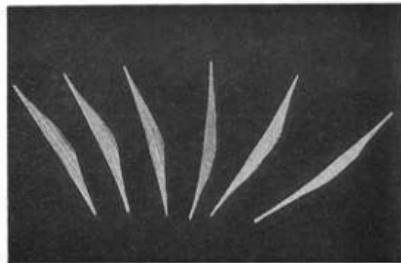


カユカキボウ（粥搔き棒）
伊勢崎市稻荷町 重田照藏氏製作
長 36.5 cm 径 3.0 cm 他 (中東毛)

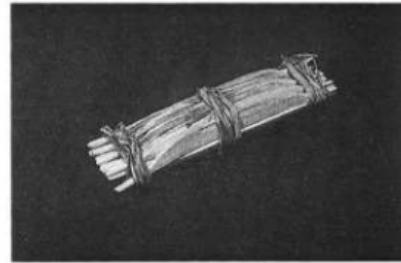


カユカキボウ（粥搔き棒）
高崎市上小塙町 清水儀平氏製作
長 42.5 cm 径 3.5 cm 他 (補充)

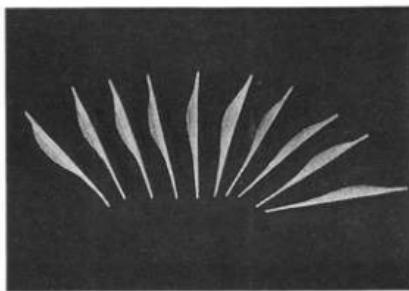
2 ハ ラ ミ 箸



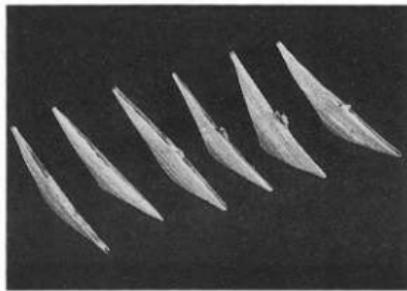
ハラミバシ（孕み箸）
北群馬郡子持村上白井 後藤省三氏製作
長 24.8 cm 幅 2.3 cm 他 (吾妻)



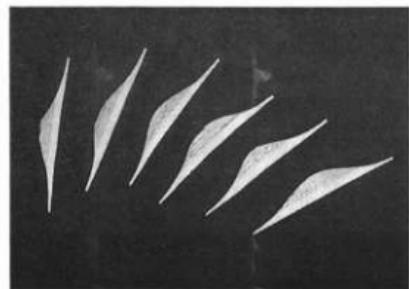
ハラミバシ（孕み箸）
吾妻郡吾妻町松谷 野口保雄氏製作
長 22.8 cm 他 (吾妻)



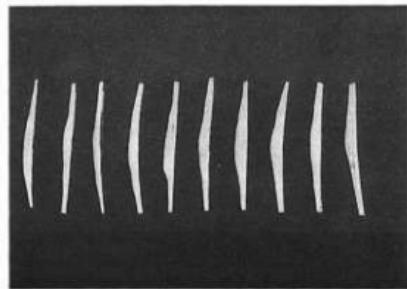
ハラミバシ（孕み箸）
吾妻郡中之条町大塚 松井次郎氏製作
長 25.0 cm 幅 2.6 cm 他 (吾妻)



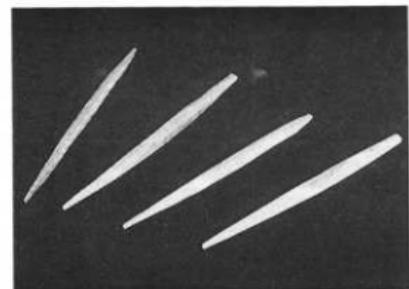
ハラミバシ（孕み箸）
吾妻郡中之条町五反田 唐沢姫雄氏製作
長 21.5 cm 幅 4.0 cm 他 (吾妻)



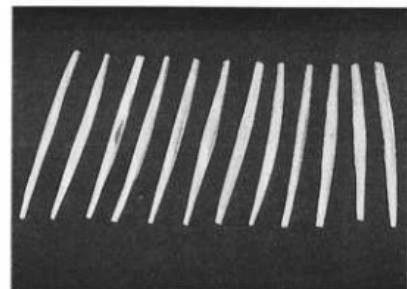
ハラミバシ（孕み箸）
吾妻郡吾妻町松谷 小池喜次郎氏製作
長 22.9 cm 幅 3.0 cm 他 (吾妻)



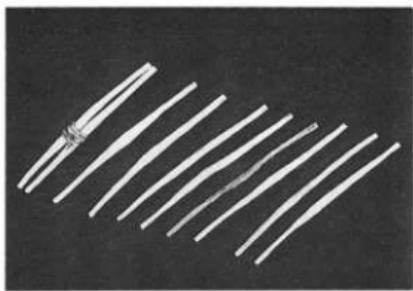
ハラミバシ（孕み箸）
北群馬郡小野上村村上 石川広吉氏製作
長 15.4 cm 幅 1.5 cm 他 (吾妻)



ハラミバシ（孕み箸）
吾妻郡嬬恋村門貝 滝沢正男氏製作
長 30.0 cm 幅 2.2 cm 他 (吾妻)

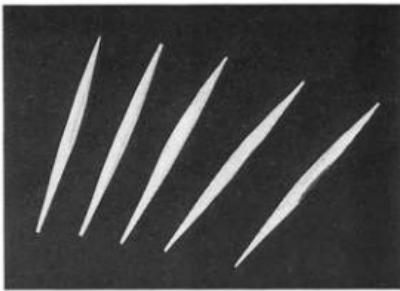


ハラミバシ（孕み箸）
甘楽郡南牧村大日向 市川太平氏製作
長 24.2 cm 幅 1.8 cm 他 (西毛)



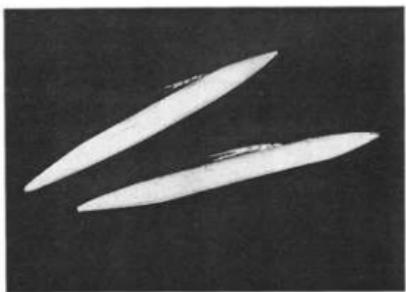
ハラミバシ（孕み箸）

多野郡万場町万場 斎藤茂三郎氏製作
長 24.0 cm 幅 1.2 cm 他



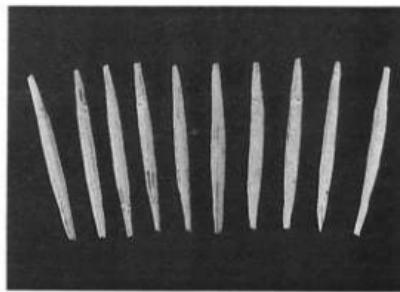
ハラミバシ（孕み箸）

利根郡月夜野町上牧 石井周治氏製作
長 22.8 cm 幅 1.2 cm 他



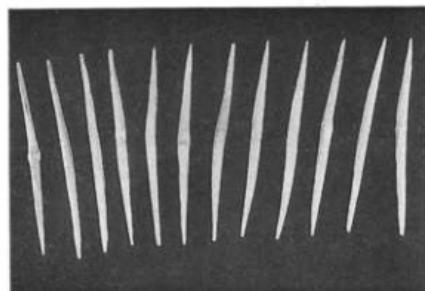
ハラミバシ（孕み箸）

利根郡新治村羽場 原沢一郎氏製作
長 29.2 cm 幅 2.7 cm 他



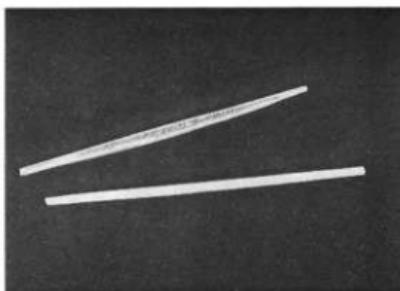
ハラミバシ（孕み箸）

勢多郡富士見村米野 柳井久雄氏製作
長 22.4 cm 幅 1.6 cm 他



ハラミバシ（孕み箸）

勢多郡新里村山上 須永利隆氏製作
長 29.5 cm 幅 1.4 cm 他

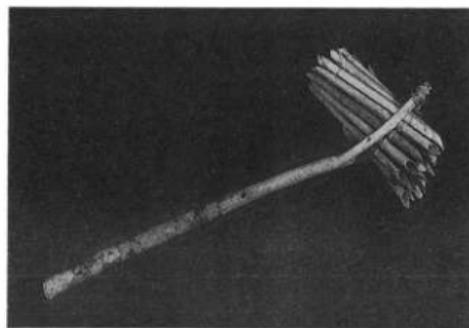


ハラミバシ（孕み箸）

高崎市上小塙町 清水儀平氏製作
長 27.9 cm 幅 1.2 cm 他

（補充）

3 そ の 他



オツツ（御筒）

吾妻郡嬬恋村鎌原
41.5 × 8.0 cm

山崎 節男氏 製作
(歴博)

D 神像・木刀等

吾妻郡内に見られる男女一対の木像道祖神には、多彩な形態のものがある。スルデの木を切り、皮を剥いだところに男神、女神それぞれの顔を描いたものが多く、表情豊かな特徴的な木像神像である。吾妻町三島では「作大将」、同町松谷では「作男作女」と呼ばれる。正月十四日に作られ、床の間や神棚などに飾られる。その夜膳立てして供えた後、ドンドン焼きで燃されるが、石像の道祖神のところへ納めたりする所も見受けられる。道祖神は火惡さが好きなので、家に何時も泊めてはいけないという。「作男・作女」「作大将」は燃すことではない。

また、六合村入山地区では、烟の守り神とされるカカシ神を作つて祀る。カカシ神は一年中神棚にのせておいて新しいものと取り替えるが、正月がすむと烟ぎわに持つて行く家もある。

木刀類では、オッカドで作るカタナが西毛地域に集中して見られる。ドンドン焼きに持つて行き、焦がしたものとボグチに飾つて魔除けとする。オッカドの皮を剥いたものやフジツルを刀身の部分に巻いて焦がすところもあり、穂状の模様がついた大小二本を飾りついている。

水上町では、カタナをドッコイと呼び、タルミの木に丸いツバをつけ、ドンドン焼きで焼いたものを軒や天井裏にさしておいて火伏せにしたという。

正月十四日は便所の神様を祭る日でもあり、利根郡各地ではセツチンビナ、セツチンヨメゴなどと呼んで、男女一組の紙人形を作り、毎年便所内に掛けて供え物をしている所が見られる。

1 木 像



ドウソジン（道祖神）
吾妻郡六合村入山 山本直義氏製作
径 4.1cm 高 14.7cm 他 (吾妻)



ドウソジン（道祖神）
吾妻郡六合村入山 山本直義氏製作
径 6.2cm 高 14.7cm 他 (吾妻)



ドウソジン（道祖神）
吾妻郡中之条町大塚 松井次郎氏製作
径 8.5cm 高 16.2cm (吾妻)



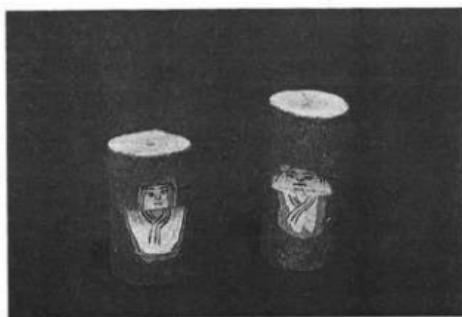
ドウソジン（道祖神）
吾妻郡中之条町五反田 唐沢矩雄氏製作
径 5.3cm 高 11.3cm 他 (吾妻)



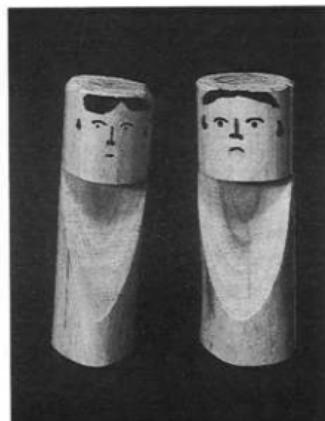
ドウソジン（道祖神）
吾妻郡嬬恋村門貝 滝沢正男氏製作
径 5.8 cm 高 17.8 cm 他 (吾妻)



カカシガミ（案々子神）
吾妻郡六合村入山 山本直義氏製作
径 7.0 cm 高 17.4 cm (吾妻)

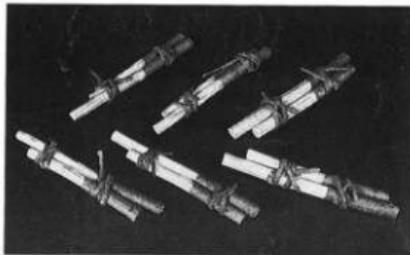


サクオトコサクオンナ（作男作女）
吾妻郡吾妻町松谷 野口保雄氏製作
径 5.0 cm 高 10.5 cm 他 (吾妻)

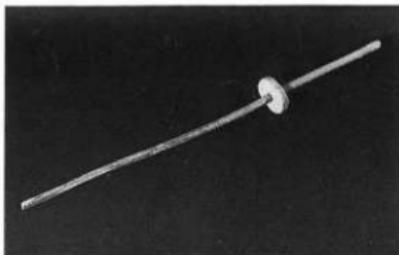


サクオトコサクオンナ（作男作女）
吾妻郡中之条町大塚 松井次郎氏製作
径 5.5 cm 高 16.6 cm 他 (吾妻)

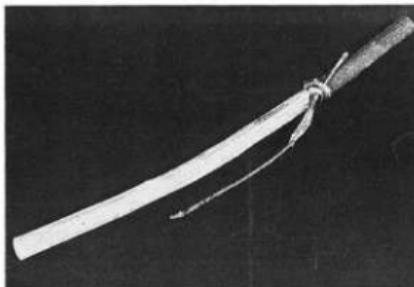
2 木 刀



ワキザシ（脇差）
多野郡万場町万場 斎藤茂三郎氏製作
径 2.4 cm 長 28.0 cm 他 (西毛)



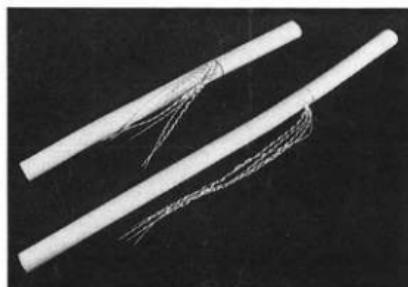
トッコイ（刀）
利根郡水上町栗沢 阿部 隆氏製作
径 1.0 cm 長 58.5 cm (利根)



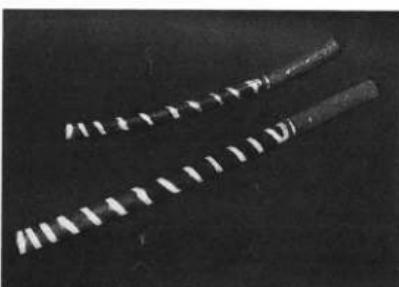
ワキザシ（脇差）
多野郡万場町万場 斎藤茂三郎氏製作
径 3.9 cm 長 78.0 cm (西毛)



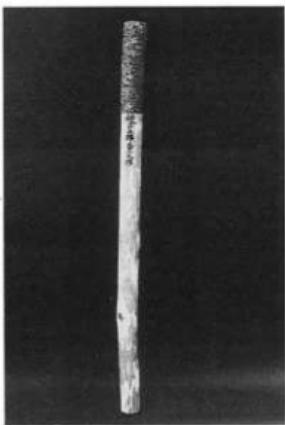
カタナ（刀）
藤岡市金井 関沼円藏氏製作
径 3.0 cm 長 47.8 cm 他 (西毛)



カタナ（大小）
勢多郡黒保根村上田沢 小池幸市氏製作
径 3.6 cm 長 73.7 cm ハナ長 34.0 cm 他
(中東毛)



ワキザシ（大小）
碓氷郡松井田町新堀 上原富次氏製作
径 3.8 cm 長 68.0 cm 他 (西毛)



カタナ（刀）

多野郡上野村榎原 滝上夏男氏製作
径 8.2 cm 長 129.0 cm (西毛)



カタナ（刀）

多野郡中里村神ヶ原 高橋登美治氏製作
径 8.3 cm 長 125.0 cm (西毛)



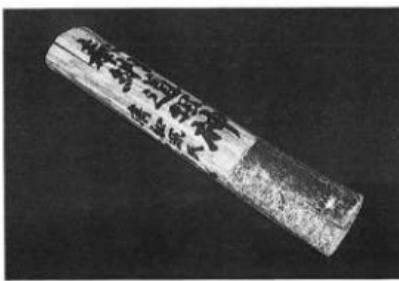
オキンマラ（刀）

多野郡上野村榎原 滝上夏男氏製作
径 13.5 cm 長 53.5 cm (西毛)



オキンマラ（刀）

多野郡中里村神ヶ原 高橋登美治氏製作
径 12.0 cm 長 49.2 cm (西毛)



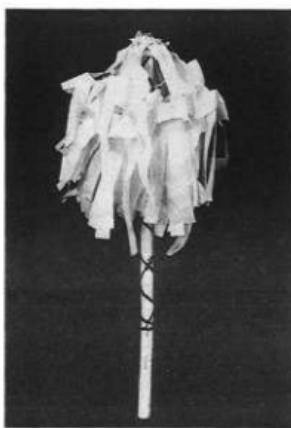
オキンマラ（刀）

甘楽郡南牧村大日向 市川太平氏製作
径 9.3 cm 長 47.2 cm (西毛)

3 道祖神祭り用具

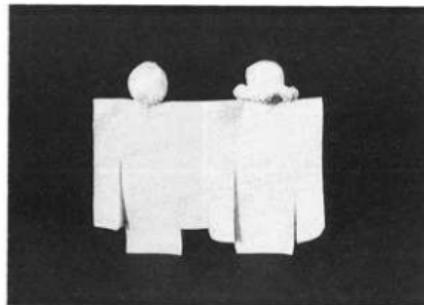


ドウジンノボリ（道祖神の幟）
前橋市上青梨子町 芥沢周作氏製作
95.0 × 24.0 cm 他 （中東毛）



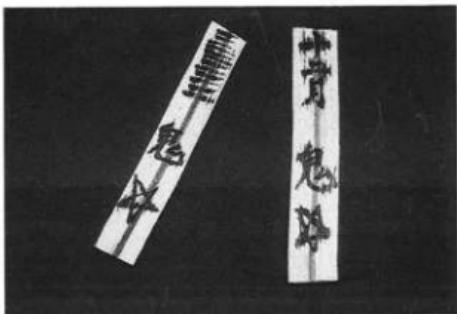
カンジンボウ（勧進棒）
吾妻郡嬬恋村門貝 滝沢正男氏製作
全長 63.5 cm 木径 2.3 cm （吾妻）

4 便所神様



セッチンビナ（雪龍爺）
利根郡川場村谷地 関 登志雄氏製作
14.5 × 17.2 cm （利根）

5 そ の 他



オニノハ（鬼の歯）

多野郡上野村樋原
22.8×4.2cm他

滝上 夏男氏製作
(西毛)



オニノハ（鬼の歯）

多野郡中原村神ヶ原 高橋登美治氏製作
25.4×4.2cm他 (西毛)

E M A Y D A M

その名の示すように、豊蚕を祈る予祝のために作るといわれ、県内ではマイダマと呼ばれることが多い。利根地域では小正月をダンゴ正月ともい、大量にマニダマを作り飾ることを示している。材料としては、米の粉のほか、アワ・ヒエ・トウモロコシ・ソバ等の粉が使われ、十二～十四日頃にマニダマ作りが行われる。マニダマを飾る木は、ボタ・マイダマ木と呼ばれ、ヤマクワ・ミズブサをはじめ、様々な木が使われる。利根郡内では、門松に用いた葦竹を家の中に持ち込み、蚕神であるオシラサマに十六マイダマをさして供える。大きなマニ形のもの十六個の中には、それぞれ小豆が一粒ずつ入れられカイコのサナギを意味するという。

マユダマの形は、現在は丸いものが一般的だが、真中のくびれたマユ型のものもある。また、オカイコとクワノハをはじめ、サトイモ・ワタノハナなど諸作の万作を祈願したものがそのままマニダマの形として作られている地域もある。小判、ソロバン玉の形をマニダマとともにクワ根っ子につけるところや鳥や花の形を作るものもある。

マニダマを木にさすことをオコアゲ（上廻）といい、取り外すことをマニカキと呼ぶなど、豊蚕の予祝としての要素は強いが、それのみでないことを多様なかたちのマニダマが示している。中・東毛地域では、正月十四日に揚いた若餅と呼ばれる餅を小さく四角に切ってさすところもある。

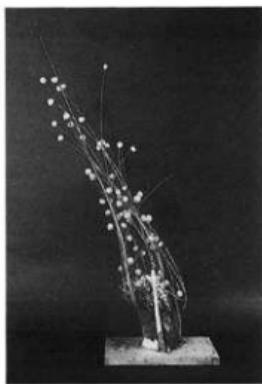
1 マ ユ ダ マ



タナカザリ（切飾り）

藤岡市金井

関沼円蔵家
(西毛)

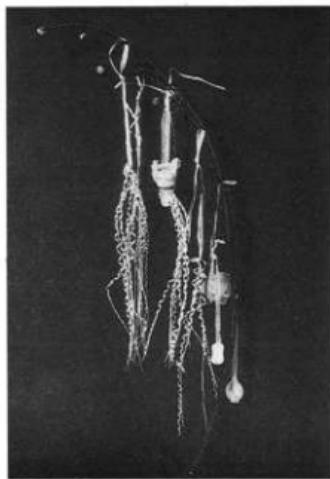


タシキカザリ（座敷飾り）

沼田市下川田町 田中長重氏製作

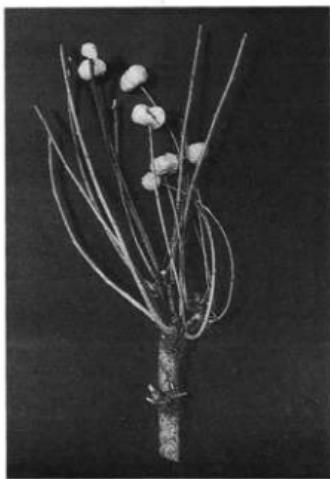
全高 90.0 cm

(利根)



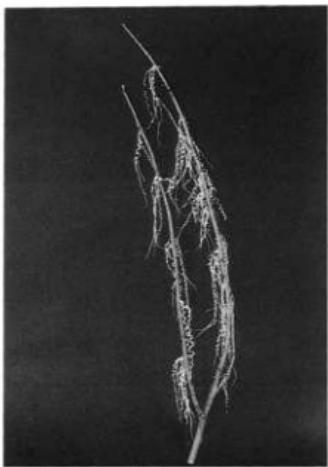
メエダマカザリ（蘭玉作り）

利根郡片品村土出 高山岩造氏製作
全長 100.0 cm

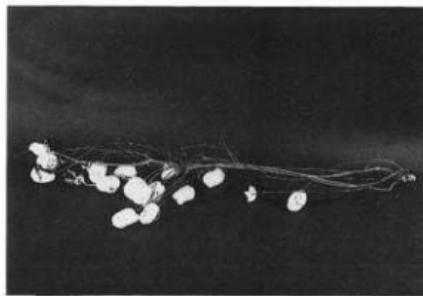


ジュウロク（十六）

沼田市下川田町 田中長重氏製作
全長 65.0 cm



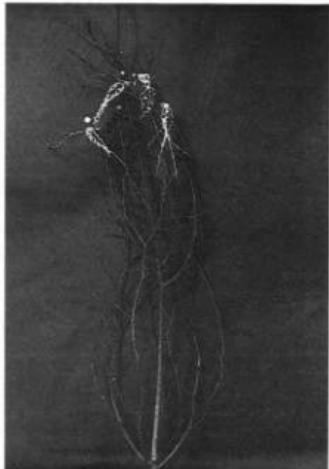
ジュワロクメエダマ（十六蘭玉）
利根郡片品村花咲 高山茂男氏製作
全長 99.0 cm
(利根)



ジュワロクダンゴ（十六団子）
利根郡川場村木賊 星野 甲氏製作
全長 112.0 cm
(利根)



ケエヅカダンゴ（肥塚団子）
利根郡片品村土出 高山岩造氏製作
全長 197.0 cm
(利根)



ケエヅカダンゴ（肥塚団子）
利根郡片品村土出 梅沢千代松氏製作
全長 210.0 cm
(利根)

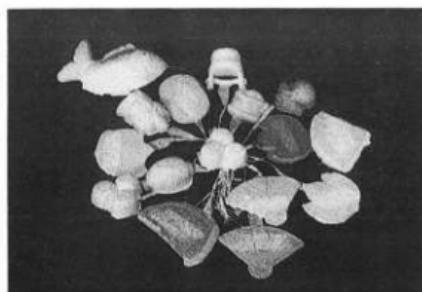
2 マユダマ木



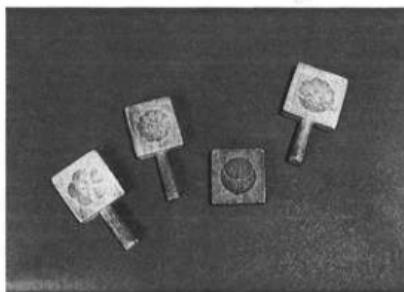
クワノキ（桑の木）
吾妻郡吾妻町松谷 小池喜次郎氏寄贈
全長 47.5 cm (吾妻)



ダンゴノキ（団子の木）
利根郡水上町寺間 山田利治氏寄贈
全長 85.0 cm 他 (利根)



ハナガシ（花菓子）
吾妻郡中之条町五反田 唐沢姫雄氏寄贈
(鯛) 7.8 × 14.2 cm 他 (吾妻)



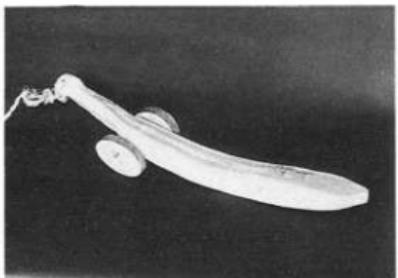
マユダマノカタ（繭玉の型）
多野郡鬼石町三波川 小柏安治郎氏寄贈
7.5 × 7.8 × 2.0 cm 他 (歴博)

F 猫子車

小正月のツクリモノの中でも、他のツクリモノと趣を異にするのが猫子車であろう。ハナ・農道具・カニカキ棒・ハラミ箸などと一緒に作られる場合が多く、十四日夜に供えられる。木はスルデを用い、素木または墨書きにより仕上げられるものが殆どである。車もスルデを輪切りにした二輪車のみである。最初からの玩具ではなく、小正月に供えた後、子供たちに与えられる点に意味があり、ドンドン焼きにも引いていかれたりする。特に縁起はなく、売られることもない。県内では、北西部吾妻郡内の六合村・長野原町・吾妻町でその製作が確認されている。六合村入山地区では、木鉢や杓子などの木工用のマグッコワシ（作り損ない）で作るが、製作時期も小正月に限定されなかったという。

なお、小正月に関連した猫子車の存在については、群馬県吾妻地域の一部のみに限定されたものと考えられてきたが、西毛地域の多野郡中里村においても確認できたことを附記しておきたい。

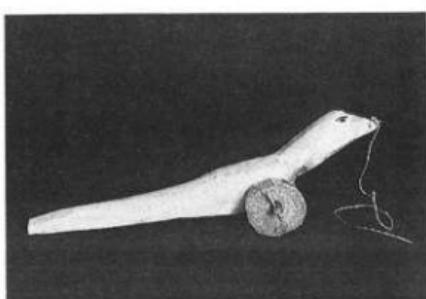
1 雉子車



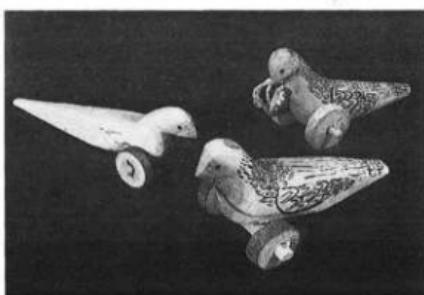
ゴショグルマ（雉子車）
多野郡中里村神ヶ原 高橋登美治氏製作
80.0 × 23.0 × 19.5 cm (歴博)



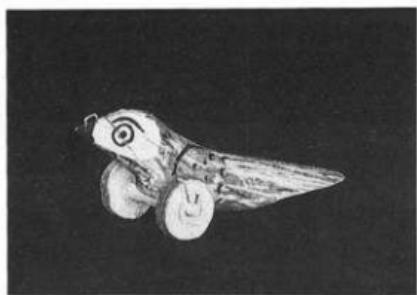
キジグルマ（雉子車）
吾妻郡六合村赤岩 富沢茂邦氏製作
49.5 × 18.5 × 27.5 cm (歴博)



キジグルマ（雉子車）
吾妻郡吾妻町岩下 海野恭斎氏製作
57.0 × 18.0 × 18.5 cm (歴博)

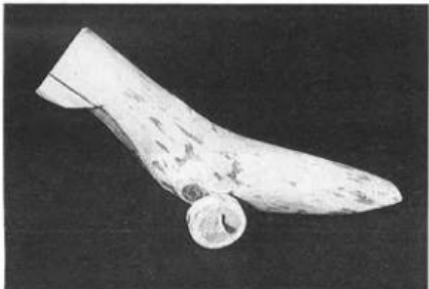


キジグルマ（雉子車）
吾妻郡吾妻町三島 丸橋祐男氏製作
39.5 × 12.8 × 11.8 cm 他 (歴博)



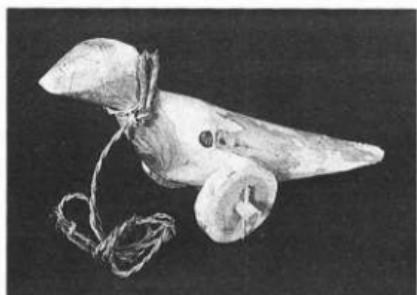
キジグルマ（雉子車）

吾妻郡長野原町林 星河義一氏製作
43.0 × 13.5 × 16.0 cm (歴博)



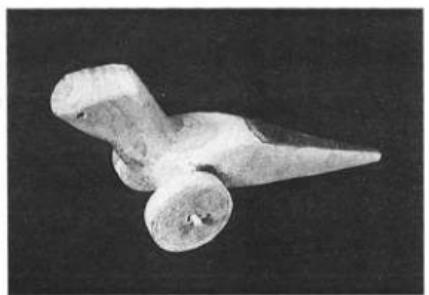
キジグルマ（雉子車）

吾妻郡長野原町大津 市村平八郎氏製作
48.8 × 14.5 × 26.0 cm (歴博)



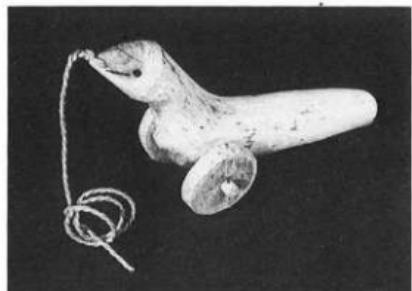
キジグルマ（雉子車）

吾妻郡長野原町川原畠 中島美一氏製作
41.5 × 12.0 × 20.7 cm (歴博)

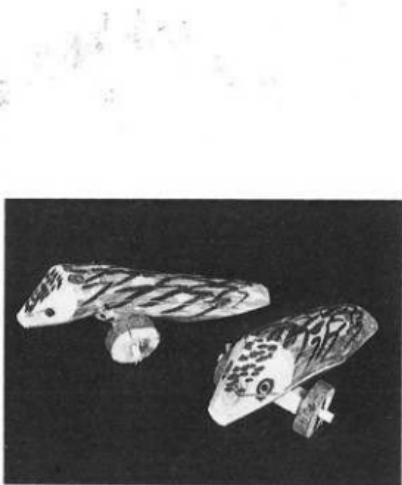


キジグルマ（雉子車）

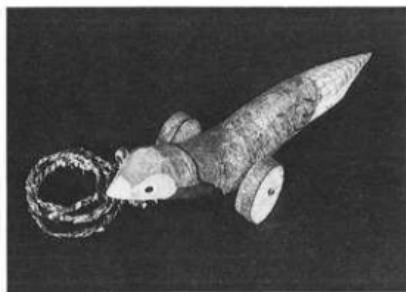
吾妻郡長野原町横壁 萩原英一氏製作
38.0 × 12.7 × 17.2 cm (歴博)



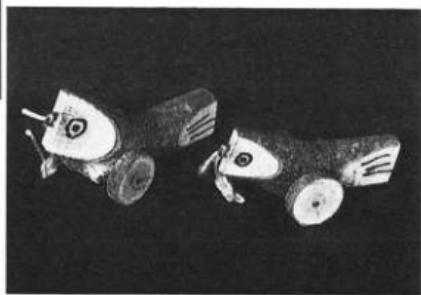
キジグルマ（雉子車）
吾妻郡長野原町林 篠原芳男氏製作
 $42.8 \times 13.0 \times 23.0\text{ cm}$ (歴博)



キジグルマ（雉子車）
吾妻郡長野原町林 篠原莊一氏製作
 $34.2 \times 12.3 \times 14.0\text{ cm}$ 他 (歴博)



キジグルマ（雉子車）
吾妻郡長野原町大津 野口安次氏製作
 $44.5 \times 13.3 \times 12.0\text{ cm}$ (歴博)



キジグルマ（雉子車）
吾妻郡長野原町羽根尾 黒岩治郎氏製作
 $16.6 \times 8.0 \times 8.4\text{ cm}$ 他 (歴博)

小正月のつくりもの(五)

—総論・図版編—

平成三年三月二十五日 印刷

平成三年三月三十一日 発行

編集

発行

群馬県教育委員会文化財保護課
群馬県教育委員会教育長

T 371

前橋市大手町一一一一
〇二七三一一三一一一一一

内線 四〇六二

印刷

有限会社 スターリー商会
高崎市和田多中町一一一三七